

衛宮士郎は死にたくない。

犬登

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ちよつとした違いから生まれた有能な衛宮士郎。

けれども、聖杯戦争ガチ勢な彼は微妙な勘違いを繰り返している？

※この作品では色々なキャラの設定が変わっています。つまり、カオス。原作のストーリーや設定を知っていた方がいいです。

## 目次

始まり	1
第一話	ガチ勢は唐突な戦争にも動揺しない。 8
第二話	ガチ勢はチャンスを逃さない。 13
第三話	ガチ勢は睡眠を妥協しない。 19
第四話	ガチ勢はソロでは戦わない。 25
第五話	ガチ勢はメタを張られても諦めない。 32
第六話	ガチ勢は乱入されても気にしない。 38
閑話	古参勢の朝は早い。 45
第七話	ガチ勢は狂人になりきれない。 53
第八話	ガチ勢は流れ弾に気づかない。 63
閑話	騎士王の湯浴みは長い。 71
第九話	ガチ勢は修羅場になっても諦めない。 77
第十話	ガチ勢は相棒しか信頼しない。 85
第十一話	ガチ勢は古参勢とすれ違う。 95

## 始まり

——それは突然だった。

目の間に広がるは炎の海。波打つように火が揺れている。その揺らぎはあらゆるイノチを天に召さんとしていた。はやく、はやく死んでしまえ、と。

——それは唐突だった。

大量のニンゲンが倒れている。いや、斃れていた。漂う怨念は禍火に焼かれた者か。それとも、渦巻く呪いに耐えきれなかった者か。どちらにせよ、もうソレを叫ぶことはできまい。

——そして。

そして、そんな中で自分は立ち上がった。それは義務のようにも思えたし、そうしたいのだと叫んでいた。周りの屍とは違うのだと。まだ死んではないのだと。

——それは、この世の地獄だった。

生きている己の魂が、まだ生きたいと叫んでいたんだ。

目が覚めると、白い部屋にいた。

何処なんだ。此処は。少なくとも自分の部屋じゃない。前に意識があったのは、あの炎の海だった。その前は——何だったか。

「……」

何をしていたかも定かではない。

取り敢えず、今は白いベッドに寝かされている。服は簡素な薄いものだ。この服も自分の物じゃない。これはもしかすると病院という場所なのではないだろうか。

暫く何をするでもなく外を見ていると、真っ黒な服を着た男の人が

建物に入ってくるのが見えた。大人のひとが着るああいう服は真っ黒だったか。白い部分もあったような気もするが、その情報も何処で知ったかははっきりしない。毎日見ていたような、見ていなかったような。

色々考えていると、この病室の扉が開いた。入ってきたのは先程の黒い人だ。

「士郎くん。」

自分に向かって喋っているのか。目は合っているが、はたして自分の名前はシロウだったのか。自分とこの人は知り合いだったのか。

「いきなりだけど、孤児院に引き取られるのと知らないおじさんと一緒に来るの、どっちがいいかな？」

知らない人だったらしい。

しかし、どうにも違和感がある。前、いや、とても最近見た顔な気がする。

知らない人には着いていくな、という言葉聞いたことがあるが、見たことある人ならばいいのではないか。むしろ孤児院の方が知らない人が大量にいるのではないか。ならばこの黒い人の方が良いのではないか。あんなにも嬉しそうに笑って――？

――ああ、あのとのおじさん。

「おじさんについてく。」

「お、それなら話が早い。早速準備を始めようか。」

そう言うと、黒い人は持ってきていた大きな箱――すーつけーす？

――に周りにあつた物を入れていく。だが動きを止めて振り返ると、どうでもいいことであるかのように。

――おじさんは魔法使いなんだ。

そう言った。

後でよくよく思い出せば、あの地獄で、おじさんは輝く金色の何かを自分の体の中に入れていた。意地で意識を保っていたのだが、急に訪れた温かい安心感につい眠ってしまったのだった。

そう思うと、おじさんが魔法使いというのも納得できる。あんな大きいものが痛みもなく体に入るわけがない。そして今まで一度も出てきたのを見たことがない。

「というわけで、父さん。魔法を教えてください。」

「ははは、士郎。というわけで、の意味が分からないよ。」

しかし、このように何故か教えてくれない。何故だ。あんなにもどうでも良さそうにポロツと口にしたじゃないか。それとも自分の何かが足りないのか。

「でもまあ、そんなに言うなら魔法の練習が日常に支障を来さないという条件を守れるならいいよ。」

——何だって？

つまり日常を完璧にこなしていれば良いということか。

「掃除に洗濯、料理とかたくさんあるけど、士郎にできるかな？」

よゆー、よゆー。

それで教えてもらえるのならば幾らでもやってみせる。

——たとえば、その条件の本当の理由が父さんが家事をサボりたいだけだと分かっている。

「父さん、また行くの？」

「ああ、今回もまた遅くなるかもしれないけど。士郎は一人で大丈夫かい？」

「大丈夫だよ、おれは。父さんこそ大丈夫？」

一瞬、切嗣が息を呑む。

——やっぱり凶星か。

「勿論さ。じゃあね、士郎。」

「うん、じゃあね。」

こうして見送るのは何度目だろうか。何をしているのかはなんとなく分かる。最近ようやく教えてもらった、魔術を使っているのだろう。切嗣の魔術は多用できないと言っていた。見せてもらった時、とても辛そうだった。

そうまでして、何を求めているのか。自分の寿命も惜しくないような物、あるいは人なのだろうか。

——人、かな。

よく考えれば当たり前だ。自分を拾うまでの切嗣を詳しくは知らないが、それまでの生活はあつたはずだ。その頃の付き合いなのか。それともそれより大事な家族なのか。

自分の家族は分からない。忘れてしまったし、元の名字も不明だ。なので切嗣に養子にしてもらって、衛宮を名乗っている。だが、もし切嗣に本当の家族がいるのなら衛宮はその人が継ぐべきなのか。

段々と小さく、見る度に小さくなっていく切嗣の背中を見ながら考えていた。

「士郎、本当にこんなので良かったのかい？」

「うん。なんかこういうの見てると楽しいんだ。」

周りには刀や剣、槍など昔から残っているものが展示されている。「こんな年から博物館が好きなんてね。まあ士郎の起源は剣だからかなあ。」

行きたい所は、と聞かれたので剣がいっぱいある所と答えただけなのに。この言われようである。

自分でも分からないのだが、刃物が沢山ある場所に行くとし、いや、かなり楽しい。刀などを見ているだけでも一日潰せる。

「で、これも創るのかい？」

「うーん、これは偽物だからいいや」

「……それは本当？」

「うん」

美しいものというのには近くにあつてすぐに見れる方がいい。あの刀が欲しい、あの剣も。などと思うのだが、如何せん展示物など貰えるわけがない。

ならば、創ればいいではないか。

「あんなに止めろつて言ったんだけどね。士郎は悪い子だから直ぐにやっちゃうからなあ。」

「でも、父さんも綺麗な女の人には近くにおいてほしいだろ？」

「……凄い喩えだね。とても分かりやすいよ。」

日常は多少の空白を抱えながらも悠々と過ぎ去っていく。しかし終わりは感じていた。もう長くはないのだ、と。

蒼い夜空が広がる。

切嗣と二人で縁側に腰かける。暑くはなく、涼しくもなく。穏やかな夜だ。

いつもと変わらず、けれど。

——月は出ていない。

切嗣は静かに語る。

正義の味方になりたかった。誰もを救える、そんな存在に。けれど、そんなものは子供の空想に過ぎず、世界はどこまでも残酷だった。だから諦めた、と。

切嗣の姿は燃え尽きた灰、あるいは枯れ木のようだった。もう何も  
ない。

青くさい情熱も、迸る理想も。

誰もが捨てる、最も尊い理想を成し遂げたくて。そして誰もが見た  
ことのない地獄に辿り着いてしまった男の成れの果て。

自分を捨つてからの何でもない日常は、あるいは彼にとって、かけ  
がえのない日々だったのか。

——なあ、切嗣。

——なんだい。

——みんなを助けるってのはそんなにむずかしいのか。

——うん。とつてもね。どうしたって敵は救えないし、守りたい人  
たちも零れ落ちていく。

それは今まで切り捨てた者たちへの懺悔なのか。口にした言葉に  
はどこことなく重みがあった。

——そっか。むずかしいな。

——うん。本当に。

そして、ここで何かが変わる。

あり得たかもしれない分岐<sup>1 F</sup>。

——切嗣。

——ん？

——あの火災のなかを歩いててき、オレ、思ったんだ。

——生きなきゃ、って。

あの地獄を生き残れなかった、死んでいった者たち。平穩は焼き払  
われて絶望を押し付けられた。彼らは何のために死んだのか。きつ  
と理由はない。

そこにいたから。だから死んだ。それだけなのだ。ならば、未来を  
見ることなく死んでいった彼らの代わりに。生き残ってしまった自  
分だけは、生きなければ。そう、思ったのだ。

——だから、助けてくれてありがとう。

今まで言えなかった。それでもこの時だけは流れるように言葉に  
できた。生きたいと思つて、それでも押し寄せる死を前に待つことし

か出来なかった自分。それを助けてもらった。あの時感じた言葉に  
尽くせないほどの感謝を絶望した男に伝えたい。

貴方は今まで誰かを溢し続けてきたかもしれないけれど、それでも  
確かに救われた人はいるのだ、と。

——オレが切嗣に助けてもらったみたいにな、オレも誰かを助けてみ  
せるよ。

だから、これは証明。

あの地獄で死んでいった彼らの分の未来。誰もを救うことはでき  
なかった切嗣の理想。救われたのが自分という奇跡。

あらゆるすべてを未来に残すために。

——そう、か。

星空を見上げる彼の目は潤んでいた。見たことのない横顔をして  
いた。そこには、やりとげたような達成感もなく、満たされたような  
満足感もなく。

——僕は、救えたんだな。

ようやく得られた、安堵だった。

## 第一話

ガチ勢は唐突な戦争にも動揺しない。

流れるように日々が過ぎる。

切嗣が逝ったあと、身の回りを整理していたら、切嗣の遺したものがたくさん見つかった。魔術的なアイテムや手記、遺書など。魔術用品は売り払うことはできないので深いところにしまい、他の物も痛まないように保管した。

遺書にも目を通した。

そしてあの地獄の原因を知った。

——聖杯戦争。

その儀式が最悪な結果で終わったために、あの火災は起きたらしい。術式は解体できるはずだが一応気をつけてほしい、できていなかったのなら代わりに破壊をしてくれ、ということ。

よほど危険なものらしい。簡単にいうと魔術師同士の殺し合い。過去の英雄を呼び出して戦う。想像もできないが注意するのに越したことはない。

あと、自分の魔術はかなり特殊なので絶対に人に見せてはいけないう、人の前で創ったものは直ぐに消せ、というのも書いてあった。

切嗣の遺してくれた長い手紙をゆっくり忘れないように読みこんだ。

それからは独り暮らしの始まりだった。隣の藤村組からたまに様子を見に来る人がいるが、少し話をするだけだ。今まで家事はすべてやってきたので、生活には困らない。

それでも、やはり少し静かにすぎた。人が一人いなくなっただけでこんなにも変わるものなのか。この家にいる限り会話は無く、人の声はテレビだけだった。

家では家事をする以外にやることもないので、専ら道場で鍛練をしていた。体を鍛えることだけに集中すれば、この孤独を忘れられる。

研ぎ澄まされた集中はかつての達人の技術を模倣することだけに費やす。刀剣から読み取った技術を真似することはできるが、いつま

で経っても不完全なままだ。

才能が無いことは誰よりも自分が分かっている。

それでも強くならなければ。誰かを救うのに困らない力を。いざという時に、後悔しないように。

同居人、というか食事を共にする人が増えた。間桐桜という一つ年下の後輩の女の子だ。珍しい青紫色の髪をしている。

料理を教わるという理由で押し掛けてきた。特に問題はないので了承したが、本心を言えば家で誰かと食事をとるのが久しぶりだったからというのもある。

だが困ったことが起きた。

彼女も魔術師らしいのだ。彼女の体を解析したときに中に色々モノがあったので気づいた。お互いに干渉しないが少しくらいは警戒する。屋敷の結界が反応していないということは敵意はないようなので、一応大丈夫なようだが。

当たり前だが、彼女がいる時は鍛練はできない。居間で普通の会話をするだけだ。だが、孤独に苛まれていた自分にとって家での会話はとても心が安らぐものだった。同年代というのもあったと思う。藤村組の人は基本的に歳上であるし、失礼な態度をとったらどうなるか。

しかし、間桐とは珍しい名字である。どこかで聞いたような気がするけれども。

同じクラスの間桐慎二の妹らしい。一切似てる箇所がなく、性格は真逆である。養子かと思うほどに似ていないので全く気づくことがなかった。流石に言わないが。

間桐慎二は才能はあるのだがそれを鼻にかけて周りを見下している。そのせいであまり男友達は多くなさそうだ。よく授業をサボるし、女の子を引き連れている。もしかしたら、そちらの方が原因かもしれない。

それにしても何故妹の方が魔術を習得しているのか。間桐慎二の体内には桜のようなモノはなかったが。あれが間桐の魔術だとしたら普通なら長男である慎二が継ぐのではないだろうか。桜の方が適性があるのか。

弓道部でもあまり間桐慎二とは会話はしない。話が合わないわけではないのだが、何故か話そうと思えないのだ。美綴と武術の話をしている方が面白い。

美綴は武術に興味があり、色々と身につけているらしい。縮地を見せたときなどは大騒ぎだった。そして少し教えたただけ、できるようになっていた。

自分みたいインチキを使っているならまだしも、普通に見せただけで習得するとは。これだから才能というのは恐ろしい。

ただ、弓で負けたことはないので良しとする。まあ自分がわざと外さない限り、美綴は最高でも引き分けなのだが。

高校二年の三学期。

何かが起こるでもなく毎日が平穩だったが、ここ数日は殺人事件がよく起こるようになった。

そんなにこの街は治安が悪いわけではないので、少し珍しい。学校でも早く帰るように言われている。そういえばガスの事故も多い。よく病院への搬送が報道されているのをテレビで見る。

正直少しおかし。

こんな短期間で何回もそんな事故が起こるとは考えられない。しかも、同じ街で。

「先輩、最近は事件が多くて物騒ですね。」

「そうだな。幾らなんでも多すぎる。当事者にならないよう気をつけないと。」

今は桜と朝御飯を食べながらテレビのニュースを見ていた。部活の朝練まではまだ時間がある。比較的ゆっくりしていても大丈夫そう。

「部活も早くに終わってしまいましたし、学校も生徒が巻き込まれないように注意はしてるみたいですけど。」

「生徒が殺されたりしたら学校も本気で動くだろうけど、今は生徒には被害もないから注意だけなんだろうな。いつか部活が停止になるかもしれない。」

「そのまま学校も休みになりそうですね。」  
「だな。」

並の暴漢なら無傷で制圧する自信はある。が、ガス事故となるとどうしようもない。できることは現場から全力で遠ざかるぐらいだろうか。

急に桜が声を漏らした。

「先輩、手——」

言われて見ると、手から血が垂れている。

「うお、すまん。どっかで切っちゃったかな。少し手当てしてくる。」  
血が出ているのを見られてしまった。食事中だったので少し申し訳ない。痛みはないが血を止めなければ。

ただ、落ち着いてみると最初の一筋の他に垂れてくる気配はない。どこから出たのだろうか。学生服の袖を捲ってみると手の甲が赤かった。というより——

「——な、どうして」

令呪のような痕があった。

「……先輩？」

「あ、ああ。大丈夫だ。料理の時に軽く切ってたみたいだ。」

慌ててガーゼを当て、包帯を巻く。これで他人に見られるようなこととはないはずだ。令呪なんて魔術師に見られたら一発でばれる。

それにしても、まさかもう聖杯戦争が始まるというのか。时期的には早すぎると思うのだが。切嗣からは六十年に一度と聞いていたが、まだ十年しか経っていない。

いや、しかしもう始まっているとすれば謎の連続殺人事件やガス事故にも納得がいく。十中八九サーヴァントの仕業だろう。監督役が聖杯戦争を隠蔽するために偽の情報を流しているらしいので、こんな

おかしな事になっているわけだ。

「さ、もう大丈夫だから、食事に戻ろう。心配してくれてありがとな。」

「…いいえ。良かったです。」

こころなしが桜が暗いというか落ち込んでいる気がする。先程までは普段通りだったので、単純に血を見て気分が悪くなったのか。

それとも、まさか令呪を見られたか。ありえない話じゃない。この街にいる魔術師は少なくともマスターになる可能性がある。

桜が殺し合いに参加したがるとは到底思えないが、強制的にマスターになってしまうこともある。

お互いのためにも距離を取った方がいいのかもしれない。

その後は何事もなく学校の支度を済ませて、いつも通りに登校したが、やはり桜はあまり喋らなかつた。

## 第二話

### ガチ勢はチャンス逃さない。

放課後、過ぎて夜。

弓道部の活動が終わり他の部員は全員帰ったが、俺は弓道場の掃除をするといつて一人で残った。

朝から学校で違和感がある。その違和感を確かめるために学校から人がいなくなるまで待っていたのだ。こんな時間まで残る生徒はいない。これからようやく学校の異常を調べられる。

「…感覚的には結界だと思うんだが。」

校門を過ぎると同時に違和感を感じたため、学校をすっぽりと覆っているのだろう。となれば、敷地内に結界の基軸となる術式があるはずだ。

それを見つけて、破壊できれば止められる。ただ、サーヴァントの物だった場合は別だ。英霊の結界など神秘が強すぎて破壊することはできない。そうなれば、こちらのサーヴァントに破壊してもらえない。そして、まだサーヴァントを召喚していないので今日は見送ることになる。

この結界の種類は分からないが少なくとも守護などの効果ではないだろう。そんな清廉な雰囲気はしない。どちらかといえば、もつとドロドロした呪い系統の物だろうか。

弓道場にはもう用がないので、きつちりと戸締まりをして外に出る。

さてどこから探そうか。妥当に、学校の敷地の真ん中とか。結界の知識はあまりないので予想をつけて探すことは難しい。手当たり次第歩き回るとしよう。

そう決めて校庭に足に向けた途端。

——キーン、と金属音がした。

学校に生徒はいない。それは分かっている。教師も最近早めに帰宅しているはずだ。だから、学校には誰もいないと踏んだ。それなのに。

「……何かがいるのか。」

金属を打ち合うことなど普通ではありえない。ましてこんな数秒間で何十回も奏でることは人間では不可能に近い。

今は聖杯戦争の準備期間。本来ならばまだ誰もが引きこもっているはず。だが、もしかしたら血気盛んな奴らがフライングを決めてしまつても不思議ではないのかもしれない。

急いで木陰に身を隠す。校庭に『強化』した目を向けると、やはりいた。

全身を蒼い軽鎧に包んだ朱い槍を持つ男。紅い外套を纏つた黒い弓をもつ男。それと、その後ろの方に赤いコートを羽織つた女。

恐らく二人の男がサーヴァントで女は紅い男のマスターだろう。

紅い男が高速で移動しながら何本もの矢を放つが、蒼い男はそれをすべて叩き落としている。

いや、待て。あれは矢じゃなくて剣だ。あの弓使いは剣を弓で放っているのか。

……面白い発想だ。考えたこともなかった。自分もあれなら射程の長くないただの射出よりも離れた敵を狙える。

と、二人の動きが止まった。何か会話しているのか。それとも睨み合いか。ここからでは分からないが近寄るつもりは毛頭ない。

当初の予定である結界の調査も変更だ。このまま二騎のサーヴァントの情報を集めるとしよう。戦闘している現場を影から見れるなんて早々ないだろうから、良い機会だ。

槍使いが突撃して、一気に距離を詰める。弓ではあれに対応しきれまい。どう切り抜けるのか見ていると、突然男の手に白黒の双剣が現れた。二つ目の宝具か。現状では分からないが、若干押されながらも互角に打ち合っている。普通に考えたら奴はアーチャーだが、ランサーと接近戦で互角だと？どんな弓兵だ。遠中近全てこなせるオーレンジなど敵にすれば厄介に過ぎる。

できればここでランサーに倒してほしいが。どうなるか。

「……マジか。」

どうやらランサーの方は宝具を使うつもりらしい。大気中の魔力

が全てランサーに収束していく。場の空気が段々と冷たくなっていくのがここでも分かる。ランサーが体を引き絞って思い切り屈んだ。対してアーチャーは徒手空拳だ。

ランサーが全身を使って跳躍する。宙で体を更に反り返らせた。

「突き穿つ——」

弓のように張った体を解放し、全力で呪いの朱槍を撃ち放つ。

「——死翔の槍」

朱い流星が敵を穿たんと突き進む。

だがアーチャーも行動を起こしていた。

「——」

何かを呟いた、気がした。それは自分にも向けられたようで。理解せずとも、心は揺れた。

アーチャーが右腕を掲げ、流星を見つめる。

「——熾天覆う七つの円環」

突如、究極の護りを帯びた七枚の花弁が展開する。そして、突き進もうとする朱槍を真正面から阻む。この先へは行かせはしないと、宣言するかのように。

だが、一枚。

最強の盾に孔が開く。それがどうしたとばかりに朱槍は止まらないう。ひたすらに敵を滅さんと。

二枚。続けて三、四、五枚。朱槍の猛攻に耐えきれずに割れていく。このままではアーチャーに到達するのも時間の問題だ。そして辿り着いたらアーチャーの体にも同じように孔が開くだろう。聖杯戦争の開幕前に脱落か。あの女も恵まれない。

と、突然にして女が動き出した。右手を掲げ、叫ぶ。

「——防ぎきって、アーチャー!!」

直後、アーチャーの魔力が爆発的に増加する。残った盾が更にその強度を増し、さらには破れたはずの花弁が修復し始めた。

そして。ついに槍はその勢いを失い、スツとランサーの手に戻った。

同時に移動を開始。目標は校門だ。

恐らく戦闘はここで終わる。お互い魔力を消費したし、ランサーもアーチャーも宝具を晒した。お互い退くのが最善だからだ。

しかし問題なのは俺だ。戦闘が終わり冷静になればこんなところにいる人間など直ぐにばれる。それに手の甲をあからさまに隠しているの、怪しまれてマスター候補だとバレることも考えられる。

なので、撤退。足元をよく見て足音を立てずに移動する。

幸いなことに、あの二騎はまだ話をしていたので、安全に学校の敷地を出れた。

が、鋭い視線を背後から感じる。

——— まずい、気づかれた。

足を『強化』して、全力の縮地で疾走する。並のバイクなど目じゃない速度だ。少しでも遠くに逃げなくては。早く家に戻って召喚を

瞬間、全身で身を振る。

脇腹を剣弾が掠めて、肉を僅かに抉っていく。

「ぐ、うあッー！」

痛みで多少体が固まるが、止まることはしない。

全力で駆け続ける。止まったら死ぬ。それだけは確実だ。殺しに来ているのが手に取るように分かる。あと少しで曲がり角に入れるので、そこまで辿り着けば遮蔽物に身を隠せる。

しかし、続いて六本の剣弾が全て急所狙いで飛んできた。どうしても避けきれない。サーヴァントではないこの身では、彼らの攻撃を躲し続けることなど不可能。先ほどの回避は奇跡だ。次はない。

ならば。回避ではなく。

「——— 投影、開始。」

防衛する。

魔術回路を起動して、振り向き様に、刀身が幅広いグレートソード三本を全身を隠すように出現させた。

グレートソードはその身が粉々に砕けながらも飛来した剣弾を止

めた。その隙に民家を盾にして路地に入る。後はアーチャーの視界に入らないように最速で帰宅するだけだ。

ほう、と感嘆したような声が聞こえた気がした。

家に到着すると、直ぐ様召喚の準備に取り掛かる。切嗣の手記を取り出して詠唱に目を通した。土蔵の床に召喚陣が書かれているので、サーヴァントの召喚にはそれを使う。

もはや一刻の猶予もない。

「——同調、開始。」

魔術回路を起動。詠唱を始める。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。」

召喚陣は爛々と光を放ち、土蔵の中で魔力が吹き荒れる。

「閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する。」

エーテルが現象として影響を及ぼし、突風が巻き起こる。大量の魔力消費に意識が持っていかれそうになるが、歯を食いしばって耐えた。こんなところで失敗するわけにはいかない。是が非でも喚び出す。

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。」

荒れ狂う魔力の渦のせいではつきりとは分からないが、微かに庭から殺意が近寄ってくる。数本の魔術回路を投影に回し土蔵の入り口から、侵入者に剣を射出する。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。」

おそらく弾かれただろう音が聞こえた。まずい。今は無防備だ。攻撃されたらそのまま死ぬ。干上がる喉を動かし、決死の覚悟で最後の一節を口にする。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——」

光が形を成したのと同時に吹いた風に軽く押されて、一步横によろける。一際大きい音を聞きながら、そのまま床に尻餅をついた。

見上げると、黄金と蒼銀が目に入る。緑碧の瞳が静かにこちらを見下ろしていた。

「問おう——」

ふと思った。

この光景を決して忘れはしないだろうと。

「——貴方が私のマスターか。」

月を背に立つその少女の姿は、俺の心象に強く刻み込まれたのだ。

### 第三話

### ガチ勢は睡眠を妥協しない。

月の光に照らされた、美しい騎士の少女。青い戦衣装の上に銀に輝く鎧を纏っていた。自分の鋼色の目と彼女の碧色の目が、一秒にも満たない間だけお互いを静かに見つめていた。

もう少しその光景を見ていたかったが、侵入者に襲われている現状、そういうわけにもいかない。

「ああ、俺がマスターだ。悪いけど、見ての通り敵サーヴアンの襲撃を受けているから迎撃してほしい。えーと…。」

「セイバーです、マスター。了解しました。迎撃します。」

そう告げるやいなや、直ぐに侵入者の方に突っ込んでいく。速い。瞬間移動のように目の前から消えた。

急いで土蔵の入り口から覗く。

「追ってきていたのはランサーだったのか。」

てつきり先ほどの攻撃からアーチャーが来たのかと思っていた。しかし、実際に家まで追ってきたのはランサーだったようだ。目撃者一人を殺すためにサーヴアンの同士で協力したのか。それとも、マスターだと思つて確実に処理をしに来たのだろうか。実際、マスター候補だったので当たつてはいるが。

戦いを見ていて驚くべきことがあつた。信じられないことに、あのセイバーの少女が大の男であるランサーを圧倒しているのだ。ランサーは防戦一方となり、段々後退していった。アーチャー相手に一歩も引かなかつた彼が、だ。

セイバーはその小さな体から放たれるとは到底思えない剛剣を繰り出している。一撃一撃が大気を打ちならしてランサーを襲う。

端からみているとランサーがわざと演技しているようにも見えるが、実際はそうではない。

彼は本気だ。本気で応戦して、それでもなお押されているのだ。先程の校庭での戦闘とは打つてかわつて彼が防御に徹している。

これだけでも、どれほどセイバーが強いのが分かる。  
繰り返される連撃は止まることなく次へ次へと繋がっていく。  
首を狙う薙ぎ払い、それを斜めに振り下ろして袈裟斬り、勢いを利  
用してそのまま回転斬り。

何度防いでも流れるような連撃によって、ランサーに反撃のチャン  
スはやってこない。

が、渾身の力でセイバーの剣をどうにか弾いたランサーは一度大き  
く下がった。それによりある程度の距離が空き、仕切り直しとなる。

「どうした、ランサー。止まっただけでは槍兵の名が泣こう。」

「うるせえ。一つ聞かせろ。テメエの得物、それは剣か？」

「さあ。剣かもしれぬし、槍かもしれん。あるいは弓ということもあ  
り得るぞ。」

「ほざけ、<sup>セイバー</sup>剣士。まさか己の武器を隠す卑怯者とはな。」

セイバーの剣らしきものはこちらからも視認できない。透明な何  
かが渦巻いているだけで、刀身の幅や刃渡りが一切不明なのだ。ラン  
サーが圧倒されていたのには、見えない剣に困惑していたのもあるの  
だろう。

範囲の分からない攻撃というのは想像以上に戦いにくい。

一流の戦闘は全ての行動が最低限だ。そうしてロスを無くし、次の  
最適な行動に繋がっていく。

しかしセイバーの剣はそれを許さない。最低限の回避は相手の間  
合い、攻撃の届く距離が分かっただけで初めてできることだ。どれほど  
避ければよいのかが分からないのでは、どうしても回避が大振りにな  
らざるを得ない。

今は丁度彼らの戦闘が中断されているので、念話というものでセイ  
バーに情報を伝える。

——セイバー？

——何でしょう、マスター。

——ランサーの真名はクー・フリーンだから宝具は撃たせないで  
くれ。下手すれば即死する。適度にやり合ったら撤退させてほしい。

——なんと……分かりました。感謝します、マスター。

彼の宝具は一撃必殺であり、いかなサーヴァントであろうと躲すことはできない。故に、わざわざ撃たせるまで追い込まなければ、その宝具を受けることもない。

また、しばらく見ていて思ったが、どうにも彼は本調子ではないらしい。所々で動きが僅かに鈍っている。

この調子なら、上手く撃退できそうだ。

ちなみに、念話をしている間セイバーはランサーとの煽り合いを表情を変えずに続けていた。

「なあ、セイバー。聖杯戦争もまだまだこれからだ。今日はお互い、こちらで分けてことにしねえか？」

「そうですね。目の前の敵を逃がすのは不服ですが……いいでしょう。退きなさい、ランサー。私は追いません。」

「おう、話が分かるやつで良かったぜ。つーわけで、さっさと退くとするか。」

ランサーの方から退いてくれるようだ。初戦から全力戦闘など、こちらから願い下げだ。魔力供給が辛くなってきたので助かった。

ランサーが驚異的な脚力で跳んでいく。瞬間的な速さではセイバーだが、やはり通常時ではランサーに分があるようだ。

なにはともあれ。

「助けてくれてありがとな。」

「我が剣は貴方と共にある。マスターを守るのは当然のことです。」

頼もしいことを言ってくれる。

危ない局面も多々あったが、こうして切り抜けられた。聖杯戦争という舞台のスタート地点にきちんと立てたことになる。

今日の朝に令呪を発見して聖杯戦争が発覚したので、感覚的にはとても濃い一日だった。だが、これからの二週間はもつと濃密で危険なものになるだろう。

やるべきことを見据えて、しっかりと行動していかなければ、即座

に敗者となる。聖杯戦争における敗者は殆どが死ぬ。それだけは駄目だ。衛宮士郎は何としても生きなければいけない。

改めて自分の召喚したパートナー、セイバーと向き合う。

「俺の名前は衛宮士郎。好きなように呼んでくれ。これからよろしくな、セイバー。」

衛宮と名乗った時に少し怪訝そうな顔をしたが、セイバーはエミヤと何かあったのだろうか。

右手を差し出し、握手をする。

「エミヤ、シロウ……はい、ではシロウと。」

「うん?……まあ、いいか。詳しいことは明日話そう。今日は少し疲れたからな。セイバーもそれでいいか?」

「分かりました、ではそのように。私はシロウの護衛をしていますので。」

「分かった。頼む。」

とは言ったものの、サーヴァントがマスターを護衛する際は霊体化する、という思い込みにより早速トラブルが生じていた。

いざ床につこうとしてみれば、セイバーが布団のすぐ側で正座をはじめたのだ。不思議に思っただけ目を向けると、その碧色の瞳でこちらをずっと見ている。

「……」

「どうかしましたか、シロウ。」

「えーと、霊体化はしないのか?」

「ああ、霊体化ですか。私はとある理由によって霊体化できないのです。その事については明日話しましょう。」

霊体化ができないなんて事があるとは。しかし、そういえば切嗣も手記に書いていたような気がする。サーヴァントの中ではわりと普通のことなのかもしれない。

「分かった、じゃあセイバーは隣の部屋にいてくれ。」

「な、それは何故ですか。護衛をするには対象の間近にいた方がやりやすいでしょう。」

「はあ!?まさか、ずっと俺の部屋にいるっていうのか!？」

「当然です。」

何を当たり前のことを、とばかりに返された。

ここで引いては駄目だ。隣の部屋で待機するのは一向に構わない。だが、同じ部屋で美少女に顔を見続けられて眠れる者がどこにいるのだろうか。少なくとも自分とはその類いではない。

「セイバー、俺は誰かが近くにしていると良く眠れないんだ。それに、今は疲れているからしつかり眠りたい。セイバーなら襖一枚あるだけで守れないってわけでもないだろう?」

「それはそうですが…」

「睡眠を取れば魔力の節約にもなる、よな?」

「……一応は。」

「よし、なら決まりだ。隣に布団を敷くからそこで寝てくれ。」

「むう……」

何とか言いくるめられたか。即興で思いついた言い訳だったが、上手くいった。

セイバーの肩を押して隣の部屋に連れていく。どこか釈然としな顔を見ない振りをして、手際よく布団を敷いた。

「あ、もしかしてベッドじゃないと寝れないとかあったか?」

「……いえ、問題ありません。」

返事の声が少し硬い。ちよつと拗ねている、のか?護衛を買って出してくれるのはありがたいが、俺の安眠のために隣で我慢してくれ。女の子に見つめられて寝られるほど、俺は肝が据わってない。よく眠れないと魔力の回復が遅くなる。

「お休み、セイバー。」

「お休みなさい、シロウ。」

布団に入り、目を閉じる。

意識を集中させると、隣の部屋の方へうつすらと細い線のようなものが伸びているのが分かる。これは魔力供給のラインだろう。ただ、もう一つの別のラインがある。これは、何なのだろう。もしかしたらセイバーの特性によるものかもしれない。詳しくは明日聞こう。

それから、ずっと気になっていたことがある。アーチャーだ。あの男、どこかで見たような顔をしていた。いや、顔は見間違いかもしいないから置いておく。重要ではあるが。

自分の髪は魔術を使う度に、色素が抜けて白くなっていった。眼の色も琥珀色から鋼色に変わり、最近では肌の一部が焼けたように黒ずんでいる。

アーチャーも白髪、褐色だった。眼の色は確認できなかったが、彼は数多の剣を扱っていた。自分の魔術に当て嵌めれば、矢ではなく剣を使っているのにも納得がいく。

自分とアーチャーでは共通点が幾つかある。だからこそ、馬鹿なことでとは分かっても、思ってしまう。

——まさか、ご先祖か？

## 第四話

ガチ勢はソロでは戦わない。

翌日。

朝食を取り、学校に向かう桜に今日は休むことを伝えた。セイバーが霊体化できないので、学校に連れていくことができないからだ。流石に、殺し合いの最中に護衛なしで学校に行くほど阿呆ではない。

また、これで桜がマスターではないことも分かった。桜だって俺がマスターだと分かったなら安易に近づかないだろう。サーヴァントを連れていればこの屋敷にセイバーが居るのも分かるはず。今までの平穏な不干渉状態が今朝も続いていたということも潔白を証明している。

良かった、蟲使いは俺では対策が難しいから。

桜が家を出ていった後に、再度朝食を作る。もちろん部屋で待機しているセイバーのためだ。せっかく現代に蘇ったのだから、どうせなら現代の食事も味わってほしい。魔力を補充することもできるし一石二鳥だろう。

と、思っていたのだが。

「シロウ、おかわりをお願いします。」

「ごめん。もうご飯が無い。今ので終わりだ、セイバー。」

「……そうですか。」

セイバーの食べる量が予想を遥かに上回っていた。味わう、という次元ではない。作った料理を片っ端から吸い込んでいるようだった。それだけ美味しいと思ってもらえた、そう考えておこう。

もうご飯が無いと知ったセイバーの頭のアホ毛が少し下に垂れた。それは可動式なのか。

「それで、色々と話すことはあるんだが。」

気持ち切り替えて、マスターとサーヴァントとして話し始める。

「はい、まずは私の真名ですね。」

セイバーも凜とした表情でこちらと向き合う。その眼からは真剣さを感じ取れた。

「——私はアーサー・ペンドラゴン。かつて、ブリテンの王だった者です。」

そうか。彼女がかの名高い騎士王であるアーサーその人——。

「——なんだって？」

「む、その心底意外そうな顔は何ですか。とても不服なのですが。」

「いやちよつと待ってくれ。アーサー王は女の子だったのか？実は男とかではなく？」

「確かに私は女ではありませんが、男装をしていましたし、それ以前に騎士だ。性別など関係ありません。」

驚いた。アーサー王が女の子だったら妃さんとはどうしたんでしょうか。それと、そのドレスで男装とか本気か。どう見ても女性用です。円卓の騎士たちは全員気づかなかったのか？知っていても、そんな事を気にしてる場合じゃなかったのかもしれないが。

「……分かった。じゃあ次の話だが宝具は？」

本人が気にしていないということに、ツツコミを入れても仕方がない。話題を変える。

「二つはエクスカリバー。これは聖剣としては最高クラスの威力だと自負していますが、街中で使用した場合は周囲にも被害が出ます。使用する場所は限られるでしょう。」

なるほど。使えば勝てるが、使える場所が少ない、と。

「もう一つは聖剣を覆う風の結界です。昨日も見せましたように、剣自体を不可視にすることができます。また、これを解き放てば強力な暴風を起こすことも可能です。」

昨日の見えない剣はそういうカラクリだったのか。てつきり剣にそういう能力があるのかと思っていた。その剣を新しい武器にしようと思っていたけれど、諦めるしかないようだ。剣は投影できても、それに纏わせる結界は投影できない。

「了解。スキルは？」

「マスターにはステータスの透視能力があると聞きましたが。それを見た方が分かりやすいと思います。」

「へえ、そんなものがあつたのか。」

ステータスを意識しつつ、セイバーをじつと見る。すると、視界にうつすらと文字が浮かび上がってきた。

セイバーのスキルは、対魔力、騎乗、直感、魔力放出、カリスマ、か。全てのスキルがB以上でかなり高水準にまとまっている。ステータスの方もセイバーのクラスとしてかなり強いレベルだ。

「それと昨日の話ですが、私が霊体化できないのはまだ生きているからです。」

「生きている？英霊になつているのか？」

英霊とは死した英雄たちがなるものであつて、生者はなれないと思うんだが。

「ええ、ですからこれは夢のようなもの。あの丘で聖杯をこの手に掴むまで見続ける夢です。」

「なるほど。」

つまり死後英霊になるのが確定しているから先に英霊扱いにしても大丈夫、ということだろうか。それで身体は生きて当時のあのカムランの丘にあるけれど、夢としてサーヴァントになり聖杯を手に入れるべく参加している、と。

「じゃあ、これで知っておくべきことは大体把握したか。次は俺の番だな。」

セイバーが裏切るとは思えないし、自分の情報は全部伝えても問題ないだろう。仲間と情報を最大限共有するのは当然のことだ。

「昨日も言ったけど、名前は衛宮士郎。魔術師というよりも魔術使いだ。使えるのは強化、投影、変化。一番得意なのは剣の投影だと思う。目で見た物は大体投影できる。」

「剣の投影……ということとは、剣が主武装ですか？」

「そうなるな。まあ、昨日アーチャーの弓も剣もランサーの槍も見たから、それも使えるには使えるけ——」

「——待ってください。シロウは宝具を投影できるのですか？」

セイバーがテーブルに身をのりだして聞いてくる。その声は驚きに満ちていた。

「そりやそうだろ。見たものは解析すれば投影できるさ。」

「な、なんという……」

愕然とした表情を浮かべて考え込んでいる。そんなに悩むことだろうか。解析して理解したものを魔力で再構築する。それだけだろうに。

「……分かりました。シロウの能力に文句を言っても仕方ありません。いくらインチキだからといって、戦術の幅が広がることには変わりませんから。マスター同士の戦いで負けることはほぼ無いでしょう。ただ、英霊には己の武具に誇りを持つものも多い。無闇矢鱈に使っていると彼らの怒りを買うかもしれないので注意して下さい。」

「分かった。」

ひとまずセイバーの中で納得はあったらしい。上品に座布団の上に座り直した。まさか、自分の特技が警告を受けるとは。やはり投影に関する話はデリケートだからあまり触れないようにしましょう。投影は使うけど。相手が怒りすぎて、もし真名解放対決になったらセイバーに任せよう。

「じゃあ、次だ。この戦いでどう動くかだな。俺の考えとしては、後方支援のできるキャスターと同盟を組むのがいいと思うんだが。」

「キャスター、ですか……。」

とてつもなく嫌そうな顔をしているが、魔術師は嫌いなのだろうか。マーリンとか。モルガンとか。

……まあ、嫌いになるのも分からないでもない。

「後方支援ならアーチャーなどでも構わないのでは？魔術の支援はなぐとも物理的な破壊力を持つアーチャーなら条件を満たすはずだ。」

「俺は戦闘特化だから令呪以外の魔術支援はできない。キャスターな

フレンドリーフアリア

ら魔術による後方支援とかは得意だろうし、セイバーの対魔力で誤射を気にすることもない。万が一裏切られてもセイバーの対魔力なら敵じやないさ。アーチャーだとセイバーを敵諸とも狙撃、とかできちまうからな。同盟相手だからといって背中を無防備にするのは避けたい。」

正直な所、あのアーチャーとは敵対したいというのもある。敵対すれば彼の全力を見れる。もし予想通りならそれは自分にとって戦力の向上に繋がることは間違いない。血の繋がった親はいないため、自分の能力を伸ばす降って湧いた手掛かりだ。違ったならエクスカリバーでぶっ飛ばす。

「…なるほど、筋は通っています。いいでしょう、まともなキャスターなら同盟に値する。」

まともって、やっぱりマーリンとかモルガンのことを気にしてるのか。よほど気に入らないらしい。確かに騎士道を掲げるセイバーと魔術師では馬が合いそうにない。

「それと、拠点はこの屋敷から移そう。分かっているとと思うけど此処は他の人が来るからな。しっかりとした防衛装置があるわけでもないし、拠点を移していった方が敵に捕捉されにくい。」

こくん、と頷くセイバー。やっぱり王様だところこういう戦法も当たり前なんだろうか。しかし騎士がゲリラ戦法みたくコソコソすることはなさそうな気もする。

「それとセイバーは霊体化出来ないんだから、普通の服も買わないと。キャスターも探さないといけないし。やば、結構忙しいな。」

キャスターの搜索は夜にまわすとして、昼間の内にセイバーの私服と新しい拠点の確保は済ませたい。

今の時刻は九時半頃。さっさと終わらして夕方に少し仮眠を取ろう。

セイバーの服を買って店を出たのが、十二時を少し過ぎたぐらいだった。

考えていなかった自分が間抜けなのだが、服を買いに行くときの服をどうするかが問題だった。この、卵が先か鶏が先か、みたいな。仕方なく自分のコートとズボンを着てもらった。かなりサイズが違ったが、我慢してもらうしかなかった。

服屋で買ったのは、日中に外を歩ける白いブラウスに青色のスカート、明るいベージュのコートと黒のブーツ。それに夜に動く用の青いパーカーに黒い短パンと帽子、青いマフラー、そしてスニーカー。マフラーは本人の要望だ。

これだけ買えば大丈夫だろう。足りなかったらまた買いに来ればいいし。

昼食。あれだけ食べるならファーストフードの方がいいかと考えたんだが。

「雑な料理は好きではありません。」

という王のありがたい御言葉により、小洒落たレストランに入ることになった。

ただ、食べる量は流石に押さえてくれたらしく会計は少し高めで済んだ。正直なところ、朝の量以上だと覚悟してたから諭吉さん二人は逝くかと思っていた。

そして、拠点。人が多く狙われにくい所を探し、結局、深山町側の橋が近くにあるホテルにした。街からあまり外れておらず、川が望める場所。

もし新都側から敵が来たら拠点の中から一方的に視認できる。なので橋で戦闘してくれると嬉しいのだが。確認次第、聖剣で薙ぎ払えばいい。

ベストコンディションだ。拠点も確保できたし、行動時の問題もクリア。相棒との信頼関係も良好で、後は良い同盟相手に会うだけ。

ランサーの真名も割れてるから、対策のしようなどいくらでもある。他のサーヴァントにしたって、アーサー王よりも強力な英霊などそう多くはない。

それに、セイバーには弱点となる死因がほぼないのも良い。モードレッドも呼ばれるならセイバーだろうし、可能性は限りなく低い。

竜殺しが召喚されていたら少し厄介だが、自分が時間を稼いでいる間に宝具を撃てば片が付く。

というか、大体のサーヴァントはエクスカリバーを当てれば死ぬだろう。あとは、いかにその状況まで持つていくか、だ。

一つは今陣取っている未遠川。川に沿って撃てば住宅地を巻き込むこともない。

もう一つは郊外の森。森林破壊が少し気になるが、人を巻き込むより余程いい。

この二つの立地を上手く活かすことができれば、勝てる確率はさらに上がるだろう。

「よし、じゃあ行こう。セイバー。」

「はい。キャスターの搜索ですね。」

皆が寝静まった夜の街へ。同盟相手を探しに行くとしよう。

## 第五話

ガチ勢はメタを張られても諦めない。

100メートルまでならアサシン以外は感知できる、とセイバーが言ったので適当にビル街を歩き回った。

が、特に気配を感知することもできなかった。住宅街の方に入っていく。ビル街から離れるに連れて段々と明かりが少なくなっていた。それでも強化をかけた眼なら遠くまで見通すことができる。

「……」

「……」

セイバーは感覚を尖らせているのか、終始無言のままだ。彼女の努力を無駄にしないために、町を隙間なく探索できるよう歩いていく。

セイバーに抱えてもらって疾走してもいいのだが、逃すかもしれないし隠蔽も面倒だ。何より他のサーヴァントと鉢合わせした時のために、少しでも魔力の消費を控えたい。

もうそろそろ幽霊屋敷と近所で有名な遠坂邸だ。こんな時に幽霊なんざどうでもいいのだが、人気のない所だと――。

「――シロウ!!」

咄嗟に左へ飛ぶ。

自分の居たところを見ると黒いナニカが突き刺さっている。避けていなければ頭蓋を貫通し、中身を撒き散らしていた。セイバーの直感は頼りになる。

そして、黒いナニカを見た瞬間、理解した。

「アーチャーか、動きが早いなー」

黒いナニカは剣だった。

すぐさま飛び起きて剣弾の飛んできた方向に目を凝らすと、紅い外套の男と同じく赤い外套の女が遠くのビルの屋上にうっすらと見えた。

仕掛けてきたか。令呪を使ったから引っ込んでるかと思ったが、予想以上に好戦的だ。

だが、この会遇は運がいい。

「セイバー、鎧を纏わず最速で突貫。制圧しろ。アーチャーはランサーと互角に接近戦をこなしていたから気をつけてくれ。矢は自分で何とかする。」

「了解しました、御武運を。」

蒼のマフラーをたなびかせ、セイバーが弾丸のように駆ける。こういう時の為のセイバーの軽装だ。セイバーの動きやすい服には鎧の分の魔力も移動に利用し、迅速な強襲をかけられるメリットがある。可能な限りマスターが狙われる時間を減らして、且つ敵に強烈なプレッシャーを与える。

案の定、その隙に幾つもの剣弾がセイバーではなく、自分の方へ飛んできた。セイバーがアーチャーの元へ辿り着くまでには少しの時間が必要なので、その時間を稼ぐ。

白兵戦になればアーチャーがセイバーに勝てるわけがない。だから、今はセイバーを信じて耐えるのだ。

——トレース 投影、オン 開始。

この魔術を使い始めて、最も己の手の中に作り出してきた物。完成すべき無銘の剣。それを二振り。

両手にしかと握った双剣で、飛来する剣弾七本を迎撃する。ツギハギだらけとはいえ原型は聖剣。たかが剣弾を叩き斬るのには十分だ。

彼女の経験を憑依させ、剣技を模倣。全身を隈無く強化。飛来する剣弾に合わせて、持った■■■■が勝手に動く。微かに残った彼女の剣技を以て、持ち主の自分を護るために。

大きく左足を踏み込んで、右の剣を切り上げ、左の剣を薙ぎ払う。残り、五。

そのまま左足を軸に回転、二振りを平行にしたまま矢を斬る。残り、三。

交差させて十字を描くように斬撃を放つ。  
すべての迎撃を完了。

——できていない。

最後の一本は軌道が変わって斬れず、流しただけで終わった。そして、その流した筈の剣が再度此方に向かってくる。恐らく必中の概念を持った物。

「おおオオオ!!」

予期せぬ奇襲は背後から。渾身の力を振り絞り、後方へ剣を振るう。

ガン、と何かを殴った感触がした。

どうやら僅かに自分の反応速度が上回り、剣の柄頭が剣弾を防いで動きを止められたようだ。その間に今度こそ真つ二つに切り飛ばす。

続いて十二本の剣弾が自分めがけて飛来してきた。このままだとそれらすべてが同時に着弾する。全部が追尾するものと考えると一撃で破壊しなければならぬ。

「アイツ、面倒なことを……………!!」

双剣で破壊されるなら数を増やし対応できないようにすればいい、ということだろう。単純だが、多くはない魔力を極力温存したい自分には厄介だ。しかしここで渋つても仕方がない。

こちらも六本のツヴァイヘンダーを投影。それぞれが二本ずつ剣弾を破壊するように、角度を合わせ回転させながら射出した。

風を斬りながら向かったツヴァイヘンダーはすべてが役割を果たして消えていく。

これで本当に迎撃は完了した。

目をやると、セイバーがアーチャーに斬りかかっていた。もう既に矢も飛んで来ていない。縮地法で一直線に彼方に向かう。

二騎のサーヴァントは激しくやりあっていて決着はまだつきそうにないが、やはりセイバーが優勢だ。陰陽の双剣を何度も弾き飛ばしていた。だがその度に双剣はアーチャーの手に現れる。弾き飛ばされた剣が存在している内に。あれはやはり――。

アーチャーを観察しつつ、マスターである女の方も警戒する。

つもりだったが、その女が高速で此方に向かってくる。

女の顔を視認した。

「——遠坂。」

「——やっぱり衛宮君か。」

アーチャーのマスターは同級生である遠坂凜だった。ということ  
は、遠坂家は魔術師か。

「やけに好戦的じゃないか。」

「まあね。獲物がノコノコ歩いていたら、つい殺したくなるでしょ？」

「……そうだな。」

獲物とは言うじやないか。余程自分の手札に自信があるみたいだ。  
警戒しておこう。

遠坂は軽いフットワークを刻んでいる。赤いコートには術式が細  
かに組み込まれ、淡く光を放っていた。手に嵌めた手袋も同様。珍し  
いはずだが肉弾戦を得意とした同業者のようだ。

二振りの剣をだらんと力を抜いて下ろし、自然体で構える。一応、  
魔力はまだ余裕がある。矢を防いだぐらいでは体力も大して減って  
いない。

遠坂が動いた。

「——ふッ!!」

どん、と地面を踏みしめて、瞬間移動に近い速度で真っ直ぐ突っ込  
んでくる。下手したら縮地よりもやや速いぐらいだ。恐らく、今の脚  
の振り下ろしは震脚。そこからの活歩だろう。ということは八極拳  
の使い手か。

ならば、なるべく距離を開ける。八極拳は肩や背、肘などを用いた  
超近接の間合いで戦う。剣を振るう自分がそこまで近づく理由もな  
い。それにあの手袋の効果を知るまでは様子見をしたい。

「——せあアアッ！」

遠坂は腰を落とした状態から、鋭く突きを放ってきた。バックス  
テップで間合いをずらしつつ、伸ばされた拳を剣で斬る。

しかし。

どうしてか、剣が跳ね返った。

余りの衝撃で手首に痛みが走る。剣を取りこぼしそうになるも、どうにか掴み直す。なんだ、今は。まるで固い壁を全力で殴ったみたいな感じだった。

「——シッ!!」

遠坂の勢いは止まらない。何もなかったかのように踏み込んできて、拳を打ち込む。

駄目だ。どうにもあの手袋は剣では太刀打ちできないらしい。もしかしたら突破できるかもしれないが、そんなものを探している内に死ぬ。

ならば当てる部位を変える。コートしかない前腕を剣で叩き、腕全体を右に逸らす。そして、顔のすぐ横を拳が通りすぎていった。

今度は上手くいった。謎の術式に跳ね返されることもない。やはりあれは拳のみのようだ。連撃を防ぐため、急いで後ろに跳ぶ。

「——」

瞬間、先程の活歩で遠坂の身体と密着した。

「がッ——!!」

腹部が潰れ、肺がへこむ。

強制的に空気が吐き出されて呼吸ができない。身体がくの字になって地面と水平に吹き飛んだ。五メートルほど飛んで地面を転がる。それでも何とか起き上がった。

今のは知っている。確か、鉄山靠だ。ショートレンジでの背部による強力な体当たり。

トラックに撥ねられた方がまだマシンなんじゃないかと思うぐらいの衝撃だ。戦闘不能とまではいかないが、かなりのダメージが残っている。

「ふうん。まだ立つんだ。わりとイイのが入ったと思ったんだけど。」

「ああ、かなりキツかった。でもまだ終わらないさ。」

武器を変える。剣では超至近距離に一瞬で持っていかれる。

だから。

「<sup>トレス</sup>投影、<sup>オン</sup>開始。」

アーチャーの弓を手に持つ。

あの加速を考慮に入れると、剣の届く間合いでは対応しきれない。彼女の剣技を模倣しても、だ。だが、遠距離に特化してしまえば、あの活歩でも問題ない。

「げ、まさか射撃戦？」

「拳法家には悪いが付き合ってもらう。」

適当な直剣を五本投影する。距離を置くために縮地で移動するが、遠坂も食い付いてきた。それに、こちらに向けられた指先から黒い弾丸が飛んできている。

あれはガンド。簡単に言えば呪い。当たったら面倒なので直剣で切り払うが、何故かそれなりの衝撃が伝わってくる。もしかして物理攻撃に昇華しているのか。

「これでも喰らっておけッ!!」

ガンドが全て外れた瞬間、一気に五本の剣を引き絞った弓で放つ。普段の弓道ならあり得ないが、それでもこの射は中る。その確信があった。

放たれた剣弾たちは一直線に遠坂へ向かっていく。それを彼女は一撃で破壊していった。いや、破壊しているんじゃない。ただ手を当てているだけだ。それだけで剣がひしゃげていく。

反射、いや物理的な運動量のみを反射か。ただの反射なら剣が真っ直ぐこちらに帰ってくるはずだ。ひしゃげるということは、剣が返ってきた力に耐えきれなかったのだろう。

ならば、拳でカバーしにくい足を狙えばいい。さらに六本の剣を投影し、追撃しようとして――。

——へえ、お兄ちゃんは面白いね。

ぞわり、と鳥肌がたった。

## 第六話

ガチ勢は乱入されても気にしない。

——へえ、お兄ちゃんは面白いね。

ぞわり、と鳥肌がたった。

振り返ると白い少女と鉛色の巨人がいた。鎧などなく、あるのは腰巻きだけ。手には石の塊をもった筋肉の塊。暗闇の中で光る理性を無くした双眼。間違いない、あれはバーサーカーだ。

ステータスはセイバー以上。勿論アーチャーよりも上だ。それにあの巨体。リーチの差も歴然としている。

脅威度は上と思っただのだろう、セイバーもアーチャーも戦闘を止め、即座に此方に来た。

「初めまして、お兄ちゃん、トオサカ。私の名前はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。」

「アインツベルン……。一応言っておくけど、遠坂凜よ。」

遠坂は知っていたようだ。噛み締めるように少女の家名を口にして睨み付けている。

それを気にする様子もなく、白い少女、イリヤスフィールは場違いにも優雅に御辞儀を言った。

「ちよつと遅れちゃったけど、まだ間に合うよね？遊んであげなさい、バーサーカー！」

ずつと黙っていた巨人が咆哮を上げる。それだけで地面に亀裂が入った。咆哮は衝撃波となり離れた自分たちにも届いていた。巨人が腰を落とす。

——まずい、来る。

「休戦協定だ、遠坂。じゃないと生き残れない。」

「分かっているわよ。流石にこの状況で戦い続けるわけにもいかないし。で、方針は？」

「この場でどちらかが宝具を使って殺す。頼めるか？」

「最高。じゃあアーチャーに宝具を切らせるから、その時間稼ぎはよろしく。しつかり壁になってよね。」

「分かった。宝具を使うタイミングは教えてくれ。セイバー、頼むツ！」

アーチャーが消え、セイバーが鎧を纏い迎撃に出る。セイバーの宝具をこの市街地で使えない以上、アーチャーの宝具で短期決戦を狙うしかない。その準備が出来るまで凌ぎきる。

本当は跳躍して空中にいるバーサーカーへエクスカリバーを放つことも出来る。だが正体がバレてしまえば、アーチャーが竜殺しの剣で対策をしてくるだろう。そのまま真名解放の直後に殺されるかもしれない。

ならば多少リスクがあってもアーチャーの宝具を切ってもらった方がまだいい。此方には遠坂という人質がいるようなものだ。

ただ、令呪に意識を向けて、セイバーをいつでも回収できるようにしておくぐらいは必要だろう。

数十メートルはあったが、バーサーカーがそれを一回の跳躍で埋めてしまった。

セイバーの剛剣が跳んできたバーサーカーの振り下ろす石の斧剣を迎え撃つ。

しかし。

「あ、くッ!!」

——セイバーの脚が地面にめり込んだ。

急いで離れようとするも、叩きつけられる握り拳がそれを許さない。見えない剣で防いだようだがバーサーカーはそのまま腕を振り切った。

セイバーが吹き飛ばされる。まるで小さな石を蹴り飛ばしたように、直線で。すぐに起き上がったところへバーサーカーの追撃が襲い、その場で鏢迫り合いになる。完全に抑え込まれている。あれでは巨体の敵に有効な攪乱が全くできない。セイバーが段々と押され、道路沿いの壁に追い詰められていく。

「<sup>トリス</sup>投影、<sup>オン</sup>開始。」

バーサーカーが持っている斧剣。それを四本投影して、最高速度で射出する。狙いは頭。防がれても構わない。ただ、少しの隙ができる

だけでいい。

バーサーカーの頭部へ殺到した四本の斧剣が衝撃を伝え、僅かに巨体をよろめかせる。

その隙にセイバーは鏑迫り合いを切り上げて、一旦距離を取り体勢を立て直した。

バーサーカーが再度距離を詰めるが、今度はセイバーが周りを駆け回り戦いは何とか拮抗する。驚くことにバーサーカーは傷を一つも負っていない。先程の四連射では無傷。セイバーの剣でもかすり傷程度で、それもすぐに回復してしまう。このままではジリ貧だ。イリヤスフィールに攻撃を行いバーサーカーの気を逸らすため、持っていた複数の剣を弓につがえ――。

「準備出来たわ。」

「了解。」

――セイバー、アーチャーの宝具が来るから引いてくれ。バーサーカーは任せろ。

即座にセイバーが大きく跳躍し、バーサーカーが孤立した。だが、バーサーカーは一瞬でセイバーに追いつこうとする。

「――させるか。」

構えた弓で狙いをつけ、即座に六本の直剣を射る。全力の射だ。遠坂に射た時の比ではない速度が出ている。

向かう先は、イリヤスフィール。

「■■■■■■――↓」

バーサーカーが振り返り、主を狙う剣弾を追う。そして、その尽くを一撃で叩き落とした。

――同時に、胴体が螺切れる。

アーチャーの宝具が遠方から飛来し、空間を裂きながらバーサーカーの身体を貫通したのだ。

直後、矢のような捻れた剣が爆発して、バーサーカーの身体も吹き飛んだ。

残っているのは膝を屈した下半身だけだ。

「バーサーカーを殺すなんて、リンのアーチャーも意外とやるわね。セイバーはどうでもいいけど、お兄ちゃんも面白いし。今度、二人だけで一緒に遊びましょう?」

イリヤスフィールはバーサーカーが死んだことなど興味がなさそうに、感想を述べる。今日はただの練習だとしても言いたげに。酷い悪寒がする。

「何を余裕ぶってんのかしら。貴方のバーサーカーは死んじやったけど?」

「え?リン、何を言ってるの?」

ただ、その声は、本当に不思議そう。

「——バーサーカーは死んでないよ?」

その意味を理解した。

バーサーカーの肉体が逆再生のように修復し始める。

「……………」

流石に想定していなかった。いや、誰が上半身の無い死体が再起動すると思うのか。一度死んだら終わり、という常識は通用しないようだ。まさか、全身を消し飛ばさないと死なないとか。

修復が完全に終わると巨人は立ち上がった。傷はどこにもなく、消し飛んだはずの胴体は元通りだ。再びその眼に光が灯る。

「バーサーカーの真名はヘラクレス。十二回違う方法で殺さないと死なないの。ちっぽけな攻撃も効かないんだから。」

「ヘラクレスですって?……何でバーサーカーにしたのよ。」  
なるほど、強いわけだ。

ヘラクレス。ギリシア神話の大英雄。極東の日本ですら知らない人はほぼいないほどの知名度をもつ。神に与えられた十二の試練を乗り越えた逸話が、十一回の蘇生宝具になったというのか。デタラメにも程があるが、不死身などにならなかつただけマシか。まだ対処のしようがある。あと遠坂の意見には同意する。

「今日はこのぐらいにしようかな。殺しちゃったらつまらないもの。またね、お兄ちゃん。」

そう言ったイリヤスフィールは無邪気に笑って、悠々と去っていった。

結局アーチャーも直ぐに戻ってきて、二組が対峙する状況に戻った。

「……で、どうする?」

「どうもこうも無いでしょ。このままお開きよ。」

遠坂は面倒くさそうに手をシツシツと振った。どうやら完全にヤル気はなくなったようだ。戦闘もして宝具も使ったことで魔力が足りないのだろうか。それとも単純に冷めただけなのか。

「あのねえ、私の家はすぐ其処なの。衛宮君がどっか行かないとゆっくり寝れもしないわけ。」

「そういえば彼処の幽霊屋敷だったな、遠坂の家。」

「やっぱりまだやる?」

笑ってない、目が笑ってない。

意外に気にしていたらしい。それなら改装でもすればいいものを。あんな見た目で人も居ないから噂が立つんだ。

「じゃあ、俺たちはこれで。」

「はいはい。今度会ったら遠慮なくブツ飛ばすから。」

「分かった。俺も全力でブチ抜いてやるよ。」

そうして二人と別れた。アーチャーが何故か此方を睨んでいたが。

やはりアーチャーも俺のことが子孫だと分かるのだろうか。まあ外見が似ているし。使っている能力も同じとなれば、流石に気付くだろう。

しかし、一体自分たちの故郷は何処の国なんだろうか。元は赤髪だったのでやはりヨーロッパの方か。アーチャーの使っていた武器

にしてもアイアスの盾、先程の螺旋剣、それに愛用しているらしい干将莫耶など、時代も場所もバラバラでまったく見当がつかない。

現地で見たとなるとユーラシア大陸を横断してアイルランドまで範囲内になる。そして各所で一級の現存するかどうかも怪しい宝具を発見したのか。可能性としては低い。

現地ではなく、何処かで一気に見た？そんなことはあり得ないだろう。宝具が三つも一度に集められるはずがない。

となると、逸話か？逸話が昇華して宝具となったのならばありえる。自分たちの能力の性質上、実物を見るか、実物に関係のあるものから情報を抜き取らないと設計図を作れない。けれども、昇華されて『あらゆる英雄の武具を見た』というように補完されればあるいは。……どんな微妙な逸話が元になったらそんな風になるんだ。

埒が明かないので、考えるのをやめて先程怪我をしていたセイバーに話しかける。彼女は遠坂邸の方を警戒していたようだった。最初の奇襲のような攻撃がまた来ないとも限らない。しかし、元から警戒しているのなら対応できないなんてことにはならないだろう。まったく、本当に頼りになる相棒だ。

「セイバー、怪我は大きいか？バーサーカーに結構飛ばされてただろう。」

「多少のダメージはありますが、直に回復するでしょう。今後の戦闘に支障はありません。」

「それなら良かった。取り敢えず今日はホテルに戻ろう。ここから先の捜索はまた明日だ。」

「はい、わかりました。」

セイバーは武装を解いて、スポーツ少女っぽい格好に戻る。初日から激しい戦闘だったが、何とか生き残れた。まだまだ課題はあるが。

そして一つ分かったことがあった。セイバーは強いが圧倒的ではない。現にバーサーカーを相手にして、通常戦闘では押し切れなかった。アーチャーに対しても恐らく凌ぎきられたのだろう。

スキルや宝具、ステータスも良くスペックは高い。だが、そのステータスや技能で上回られるとなまじ優秀な分、泥沼になる。自分の魔力を消費しきる前にどう敵を倒しきるかが重要な問題だ。

アーサー王というインパクトが強すぎたが、勿論相手だって本気だ。ヘラクレス並みの大英雄が他にも喚ばれている可能性がある。それこそ、そんなにいるとは思えないが。もはや確信は持てない。神霊クラスが相手でも敗れることのないようにしないと。

まずは戦力の増強だ。同盟相手という未確定戦力ではなく、信頼できるモノが必要だ。やることは一つ。当然――。

## 閑話

### 古参勢の朝は早い。

私こと遠坂凜は天才魔術師であり、十年間待ち望んだ聖杯戦争に意気込んでいた。これが自分の魔術師として試金石になる。これを越えれば、輝かしい第一歩を踏み出せる、と。

しかしいざ召喚しようとした日になって、亡きお父様の仕掛けていた『時計が一時時間早くなる』というイタズラ（意味不明）が発動したせいで朝早く起床することになっていた。

とても萎える。こんな時に何いらんことしとんじや。そういう人じゃなかったでしょ、キャラ的に。

学校に到着し、間桐慎二に絡まれて謎の勘違いをされる。今日に限って絡みが激しい。更に萎える。思い切りウザいつて言ってるでしょうが。こっちくん。なんであんなのに靡く女子がいるのか分からない。

弓道場に入って当初の目的である桜を見つける。今日も元気なようでお姉ちゃんは嬉しいです。お姉ちゃんも少し元気になれたよ。隣には老けてると噂の、そして桜が通い妻をしている衛宮士郎がいた。

彼は明らかに魔術師なのだが、セカンドオーナーたるウチには一度も挨拶に来たことがない。別に気にしてないけど。全然気にしてないけど。

……まさかセカンドオーナーっていう存在を知らないとか、ないわよね？

廊下で運悪く生徒会長様に遭遇し、口うるさくガミガミ言われる。一回予算に口出ししただけでこれだ。一応仕事してますアピールをしようと思っただけなのに。

しかもその後何もしなければ、仕事しろって言われた。誰がするか。

退屈な授業も終わり、さっさと帰宅。

召喚の準備と意気込んだはいいものの、肝心の触媒が無いのに気づき、家中を探し回るも見つからず。

タッグの強さは相性の良さだ、と開き直ったのが午前一時。夕飯も取らずに探し回っていたため腹ペコだった。

が、今から食べるのも戸惑われたので、断食を決意して最高のタイミングになるまで待っていた。

そして、寝落ちした。

「……………」

時計を見る。午前三時を指していた。つまりベストタイミングから一時間遅れ。

「……………終わった。私の聖杯戦争は召喚する前から終わっちゃった。は、はは。」

自分が阿呆らしすぎて笑いしか出てこない。何故ベッドに腰かけて待ったし。そりゃ誰でも寝るでしょ。ただでさえ強いサーヴァントを喚ぶ触媒がないのに、自ら最後のチャンスを潰すとは。

「ははは、ははははははは!!今さら時間がなんぼのもんじゃあ!!この遠坂凜、その程度で止まるものかあ!!」

深夜に色々と吹っ切れる現象。

通称”深夜テンション”が発動していた。

「サーヴァント、アーチャー。召喚に応じ参上した。君が私のマスタ―か?」

「うわ……………まあ、そうなる、わね。」

外した。思いつきり外した。やっぱりセイバーは来ないのか。一時間前だったら喚べてたのかな。アーチャーのステータスはありえ

ない程低いし。視界に浮かぶステータスにはDとかCが並んでいる。三騎士は強いって言われてるらしいけど、どう見てもこのアーチャーは弱いわよね。やば、考えれば考えるほど絶望してきた。それに、どうしてこんなドヤ顔なのコイツ。無駄にカツコいいけど。背も高いし。全体的に赤色っぽい外見なのはポイント高——  
|。  
「……それが自分のサーヴァントに向ける第一声か？英霊によっては殺されるぞ、お嬢さん。」

——あ？

「アンタ、今私のことを何て言った？」

まさか『お嬢さん』とかフザけたことを言っていないわよね？

場合によっては鉄拳制裁も辞さないつもり。絶対に一発は殴るけど。

「どうした、何か気に障ったかね？ただ私は口に気をつけたまえ、と言っただけだ。お嬢さん。」

ははは。

「いい度胸してるじゃない、アーチャー。アンタ二回も私のことを口りみたいって言ったわよね？」

「なに？いや、待てマスター。そんな話をしてるわけでは——」

「——そんな？ あ、もうキレたわ。マジでぶっ殺だわ。コイツ、絶対に許さねー。」

今更慌てて言い訳しようとしたって遅い。

手の甲にある令呪に意識を向けて起動させる。ツインテールと貧乳を侮辱する不屈き者をぶちのめすために。

「令呪を以て生意気な使い魔に命ずる。」

「お、落ち着けマスター!!こんなことで令呪を使うなど正気か!？」

「そこを、動くなアアアッ!!」

魔術も使用した、人生で最高の一撃。<sup>グーパン</sup>

どん、という鈍い音が地下室に響く。

数秒後、アーチャーは何かを言いながら崩れ落ちた。

——今回は大丈夫だと……思っていたのに……。

「いやーごめんごめん。私、禁句言われると冷静じゃられないのよね。」

「……私が言う前から冷静とはほど遠かったと思うのだがね。」

リビングのソファアーに腰かけて、私とアーチャーは向かい合っていた。あれから数分して落ち着きを取り戻した後、場所を移したのだ。

「あ、この紅茶美味しい。」

「それは結構。どうやら今度はマスターの機嫌を損ねずに済んだようだ。」

「何でそんな捻くれてんの、アンタ。」

薄々感じていたことだが、この男は相当な捻くれ者で皮肉屋だ。しかし、何故か憎めない感じがする。所々で気が利いたりするからだろうか。先程の召喚の影響で少し散らかった地下室を手早く片付けていたし。紅茶を淹れてくれるし。

「まあいいわ。真面目な話をしましょ。」

「ようやくか。」

紅茶の入ったカップを置いて、アーチャーを見る。む、色とか抜きにしたら結構東洋人っぽい顔してるかもしれない。

「私は遠坂凜。流転の魔術とそれを使った宝石魔術がメインよ。あと少しだけ格闘技も齧ってる。よろしくね。」

「なるほど、了解した。……凜、か。実に君らしい名前だ。」

「ふふ、ありがと。そんなこと言われたの初めてかもしれない。」

いきなり名前を誉めてくるとは。ヤバい、コイツかなりのやり手だ

わ。女の扱いに慣れてる。あれ、でも英雄だし当たり前？つまり英雄は皆ナンパ野郎？

「それで。次は貴方の番よ、アーチャー？」

直後、アーチャーの顔が爽やかなナンパ師から苦虫を噛み潰したような感じになった。

「……それなのだが。私の真名は言えない。」

「令呪使う？」

「待て。これは本当に」

「令呪、使う？」

あ、悩んでる。滅茶苦茶悩んでる。

「……………分かった。」

「アーヨカッタワー、キチヨーナレイジュヲツカワズニスンデ。」

「凜、真面目にしてくれ。君が言ったのだろう？」

「くっ。」

捻くれ者をやり込めた喜びを味わっていただけなのに。

「それで？名前は？早く言いなさいっての。」

「ああ、言うとも。オレの名は衛宮士郎。君の同級生だった男だ。」

「ふーん、そう——」

「——え。」

何を言ってるんだコイツは。

「何を言ってるんだコイツは。」

「おい。」

「いやー冗談キツイわよアーチャー。貴方が衛宮君？ないないないない。衛宮君が英雄なんてありえないってば。それに現代で英雄になれるわけないでしょ。」

「現実を見るろ、凜。仮に違うとしたら、私が衛宮士郎の名前を知っている理由をどう説明する？」

「……………ですよねー。」

ヤバい。マジだ。マジに衛宮君な感じだ。こんなに低いステータスも説明がつく。何で？どうして？これから先、衛宮君が弓とか銃と

か使って戦争で無双しちゃうの？

「動揺するのは仕方ないが話を聞け。」

「……分かったわ。取り敢えず落ち着く。」

「まったく。君はそこまで残念なキャラだったか？もう少し優雅だと思っていたのだが。」

「優雅？なにそれ。私には合わないわ。……まあ、そんな家訓的な何かがあったような気もするけど、そこはそれ。自分らしくが一番よ。」

「……何だと？」

あれ、何か可笑しなことを言ったのだろうか。

「まあいい。私が英霊になった理由だったな。」

「そうそうそれそれ。」

「簡単なこと。守護者になる契約を世界と交わした。そして死後に英霊となっただけだ。」

「あー、なるほどね。守護者になるっていう可能性を忘れてた。」

どうして世界と契約するようなことになったかは聞かないでおう。明らかに地雷だから。気まずくしたくないもの。

「じゃあ宝具は？英霊なら持つてるでしょ。」

「固有結界だ。」

「………何て？」

「固有結界。それもかなり特殊な部類だ。」

何だってこんな爆弾ばかり持つてくるのか、このサーヴァント<sup>衛宮君</sup>は。

「……驚くのものにも飽きたわ。どれぐらい特殊なの？」

「解析した武具、たとえ宝具であっても固有結界内に登録し、結界外でも魔力を消費すれば投影できる。」

「――」

魔術師を嘗めてるのかな？なにそのフザけた能力は。宝具を投影して何ですか。そんなことが許されていいの。

……あ。

「もしかすると固有結界って今の衛宮君も使えるの？」

「いや、聖杯戦争初期の衛宮士郎は半人前以下の雑魚だ。まともに魔術回路も起動できないだろう。」

「魔術師って言えるレベルじゃないでしょ。というかマスターだったんだ。」

今の言い方だと聖杯戦争に参加しているっぽい。見るからに魔術師なのに魔術回路を起動できないらしいし、それでマスターつてもう意味が分からない。

「ああ、順番としては最後のマスターだったな。あまり詳しくは覚えていないが。」

「えー。衛宮君のサーヴァントは？」

「確かアーサー王だったと記憶している。ただ、衛宮士郎からの魔力供給が不十分でかなり弱体化していた。覚えているのはその程度だ。」

「何でそんなヘッポコがアーサー王なんて大物呼び出してんのよ!!」

天才魔術師の私には未来の同級生が来てるのに。待遇の差が酷すぎる。でもアーチャーは能力に関してはインチキって言えるぐらい強いから、良かったかも。

「もういい、詳しいのは明日ね。行く前に疲れたら困るもの。」

「ほう、もう動くとはな。好戦的なのは悪くないが。偵察か？それとも強襲か？」

「何言ってるか分かんないけど、今から行くのは教会よ。令呪を確保しに行くの。」

そう言った途端、アーチャーが目を見開く。凄い剣幕で詰め寄ってきた。近い近い。

「何だど？最初に監督役を殺すつもりか!？」

「何で殺すの……。監督役と知り合いだから召喚したら来いって言われているの。何でも、令呪を大量にくれるって話よ。」

「馬鹿な、そんなことが……。」

何か悩んでるけど、どうやらこの話を衛宮君は聖杯戦争の後も知らなかったってことかな。まあ、バレてたら不味いけど。

「はいはい。さっさと行くわよ。切り札が増えるのには違いないんだから。」

「凜、本当にその監督役は信用できるのか？後ろからサクツと刺され

たりしないだろうな？」

「あはは、ないない。そんな殺伐とした関係じゃないもの。」

「……しかしだな。万が一ということもある。護衛はさせてもらおうぞ。」

「大袈裟ね、アーチャーは。まあいいけど。」

少し眠気を感じながらもコートを羽織って教会に向かう。

二時間後、遠坂凜はアーチャーに抱えられて家に帰って来た。

「ひぐつうぐつ！ごめんえびやぐん！こわかった、こわかったよお!!」

「まったく、だから言っただろう。監督役など信用するなど。いい加減泣き止め……おい待て、私の外套で拭おうとするな!!」

慌ただしく玄関に入っていく二人。その服には赤い液体が飛び散っていた。

## 第七話

ガチ勢は狂人になりきれない。

朝になつても昨日の疲れからか本調子ではなく、朝食を摂った後は二度寝した。本当は寝る前に腹に物を入れなくなかったのだが、目が覚めるとセイバーが

「朝食の時間ですね、シロウ。」

と、間髪いれずに催促してきたので仕方なくだ。

買ってきた食パンと野菜をいくらか、それとハムを冷蔵庫から取りだし即席でサンドイッチを作った。そのまま置いておくのも冷蔵庫に入れるのも嫌だったので、結局食べてしまった。

王様から不満は出なかつたということは、一応お目になつたらしい。手作りなら許容範囲内なのか。

ただし食べ終わった後の顔を見るに、量はまったく足りなかつたようだ。

二度寝で三時間ほど経ち、午前十一時近く。学校近くに行くのと知り合いに会いかねないので、大橋を渡って新都の駅前方面に来ていた。

一応、帽子を被って白髪が目立たないようにしている。パーカーなどのフードも考えたが、昼間からフードをしている男と外国人の少女が歩いていたら完全に事案だ。なので昨日適当に購入した帽子を使っている。

橋を渡っている途中、セイバーが川の先に広がる海をじつと見ていた。海を見るのが初めてってわけでもないだろうし、他に何か感じ入るものがあつたのだろうか。蛮族の侵攻を思い出す、とか。円卓の騎士たちと正面から戦える蛮族は何なんだ。

昼飯は昨日と同じく近くにあつた料理店でとつた。今回は中華系だ。昨日の朝、何故か異常に上手く箸を扱っていたので、今度はレンゲを使わせてみた。当たり前だが普通に使えていた。レンゲは簡単すぎたか。

セイバーはどんな物を使つても上品に見える。英霊が箸を使える

理由が非常に気になるが今は置いておこう。

少なかった朝食の反動か、諭吉大先生が三人殉職してしまった。一応言っておくと、そのうち俺の代金は七三〇円だ。

昼食の後しばらく歩いて、活気のある街から遠ざかり。

「ここは……。」

「見ての通り教会だ。」

自分たちは新都の外れにある教会に来ていた。

一般人にとって、この教会は神父がいて礼拝に行く極普通の場所だ。どこの街にもあるような何の変哲もないスポットに過ぎない。

しかし聖杯戦争の参加者にとっては重要な意味をもつ。というのも、此処は戦いに負けた時の避難所なのだ。サーヴァントを失ったマスター、もしくは稀にマスターを失ったサーヴァントが監督者の保護を求めて訪れる。本当に保護されるかはさておき。

セイバーが怪訝な表情を浮かべる。

「シロウ、まさかとは思いますが棄権を？」

「ありえない。俺はセイバーを放って途中で下りるなんてしないさ。」  
「では何故？」

「どうやら前回から監督役が参加者と癒着しているらしい。というわけ、それが本当かどうか調べて、黒なら処理しておこうってことだ。情報共有とかされたら厄介だしな。」

前回の第四次聖杯戦争では、監督役とその息子であるアサシンのマスター、アーチャーのマスターが結託していたそうだ。

「監督役を殺害する、ということですか……。」

「まあ、いつか誰かが殺すと思う。監督役ってのは予備の令呪を大量に持っているらしいんだ。だから、その令呪を手に入れることが出来れば一気に勝利に近づく。」

「……確かに、どの陣営も考えそうではありません。」

令呪は絶対の切り札だ。あつた方が良いに決まっているし、無いならそれだけ負ける確率が高くなる。判断さえ間違えなければ、どんな攻撃にだって対応できる。最後の決戦では間違いなく令呪の応酬になるだろう。一手上回れば、それで片がつくのだから。

「それに敵に奪われると分かっている切り札を態々見逃す意味もないだろう?」

「……いいでしょう。それが勝利のために必要ならば。」

「ありがとう、セイバー。」

良かった。かなり渋っていたが、どうにかセイバーの了承を得られた。拒否されても当然と思っていたのだ。なにせセイバーは騎士。このような反則行為は認めないかもしれない。

ただ、拒否されたら素直に止めるつもりだったけれども、自分としてはこの策は卑怯だとは思わない。

監督役だってコチラ側の人間だ。理不尽な死に方をすることぐらい覚悟しているだろう。魔術に関わってしまった者にキレイな終わり方はいないのだから。そう、あの火災の時のように。

「じゃあ行こう。」

重々しい扉を開けて、中に入る。

中には誰もいなかった。長椅子は全て空席で物音ひとつすることなく、肝心の神父すら見当たらない。奥の部屋だろうか。

建物全体の解析を始める。礼拝堂、中庭、通路。

「——ん、地下室か?」

隠されたように地下へと続く階段がある。教会に地下室?何の為にそんなものが作られたのだろうか。徒の倉庫の可能性もあるが。

「下りますか?」

「勿論だ。何かないとも限らないし、探してみる価値はある。」

——この教会には何も無い。

「分かりました。では私が先に行きますので付いてきて下さい。」

暗く、じめじめとした空気が溜まっている地下室に下りていく。階段を下りる際の足音がやけに響いていた。音の反響からすると、かなり深く広い空間があるようだ。

——引き返せ。

何故か、地下に向かい始めた時から悪寒が止まらない。

「……何だっつてんだ。」

本当に此処は神の家を謳う教会なのか。

そう思ってしまうほど淀みを感じる空間だ。引き返す、というほどではないが最大限に警戒する必要がある。

——それだけじゃ足りない。引き返せ。引き返せ。

引き返せ。

階段を下りて、開けた場所に出た。天井を支えるための柱が数本ある。正面の何かのシンボルを見るに、聖堂らしい。

見渡すと、階段の下に暗い扉がある。さらに部屋があるようだった。

——これより先は戻れなくなる

ぞ。

酷くなる悪寒を無視して、扉を開ける。

「これは……。」

「どうした？」

その部屋に入ると直ぐにセイバーが立ち止まってしまったので、体をずらして奥を覗き見る。

暗くてよく見えない。

強化してもう一度目を向けると、そこには。

「

先程から感じる悪寒の正体があった。

足元に転がっている、壁に打ち付けられている、天井から吊られている肉塊たち。死体にしか見えない。死臭しか感じない。

胴と頭しかないそれらは、今にも腐り落ちて崩れそうだ。しかし瀬戸際で肉体の崩壊が押さえられている。押さえられてしまっている。決して苦しみから解放されることはない。

「生きて、いるんだな。こんなになつてまで。」

「ええ、微かにですが動きがあります。ですが意識は無いでしょう。恐らく自我も。」

その通りだろう。ここにいるヒトたちは生きている。というよりも、死なないようにされている。その肉体が入れられている棺が長い間魂を搾取できるように。

駄目だ、これに同情してはいけない。悲しんではいけない。感情を動かしてしまつては、もう二度と前に進めなくなる。それだけは許されない。

冷静になれ。これは戦いなんだ。こういうことをする輩がいてもおかしくはないだろう？

だから、思考を戻せ。

今は何も感じなくていい――。

「……気になるのはこの魔力を何に使っているか、だな。まあ思いつくのはサーヴァントへの魔力供給ぐらいか？」

「つまり監督役は同盟相手のサーヴァントに供給しているか、監督役自身が契約している、ということですか。」

「たぶんな。もしかしたら監督役が自分で使う用に魔力を溜めているのかもしれないけど、その線は薄い。サーヴァントを強化した方が効率がいいし。」

しかし、まだ聖杯戦争は始まって数日。前哨戦があったとしても一週間ぐらいだ。その間に殺されたとされた人数を明らかに超えている。ならば聖杯戦争の前からこの人たちを捕まえていたということか。

「これだけの人数を一体何処で……？」

隠蔽工作を行いながら少しずつ拐ったのか。しかし今回の第五次聖杯戦争は時期が異常に早かったはず。十年で始まることを監督役

は知っていたのか？切嗣ですら知らなかったというのに。

このような搾取をしていたら六十年も人間が持たないだろう。監督役も分かっていたはずだ。けれど実際にやっているということは、それが必要だったのか。

「聖杯戦争が始まる前からある程度の魔力を必要としていたのか？」

「ならばサーヴァントではなく、やはり監督役自身が魔力を使っていたのでしょうか。」

「そういうことになるけど。こんなに魔力を集めて何をしていたんだ？」

結局そこに行き着く。もう少し探せば手掛かりが見つかるかもしれないが、悠長な事は言っていられない。此処は恐らく敵であろう人物の本拠地なのだ。

「取り敢えず、この人達を……殺そう。これ以上苦しむ必要はない。」  
「分かりました。ですが、私が全てやりましようか？」

言外に人を殺すのは辛いだろうと言ってくれているのか。

「いや、大丈夫。こういうのは見慣れているしな。いつかはやらなきやいけない事だ。」

「……分かりました。では私はあちらを。」

セイバーが奥の方へ進んでいく。どこか悲しそうな表情を浮かべていた気がした。

直剣を投影する。

僅かに蠢く肉塊に突き刺そうと腕を振り上げた。  
ずぶつ。

「——が、あッ。」

かくん、と体が前のめりになる。

熱い。右の脇腹に違和感がある。何か冷たいものが突き刺さったような。

「せい、ば——あ、う——」

ずぶつ。

まただ。次は左の肩。骨が砕けた。

視界が明滅する。頭が焼けそうだ。熱い。もう熱さしか感じない。体が燃えているような気がした。

体を支えていられない。倒れる。

「——シロウツ!!」

寸前でセイバーに支えてもらえた。

触れ合った肌から暖かい魔力が流れてくる。契約のラインではない、もうひとつのライン。それを通して。

全身から急激に痛みが引いていく。まともな思考が戻ってきた。

「は——あ、サン、キュー。もう少し、このまま。刺さってるの、抜いてくれ。」

「分かりました!!」

ぐん、と体が引つ張られて、刺さっていた剣が抜けた。少しだけ血が垂れる。痛みもあまり無い。

投げ捨てられた剣を解析。判明、黒鍵。

なるほど、似非監督役のお出ました。

「——投影、開始。」

投影した巨大な石の斧剣を床に突き刺し、次弾以降への盾とする。段々と貫かれた部位の傷も治ってきた。反撃といこう。

「——づう、ふう。……行くぞ、セイバー。後ろから援護する。」

「な、傷はもういいのですか!?!」

「能力のおかげで問題ない。行つてくれ。」

困惑しながらも頷いたセイバーが斧剣をすり抜け、疾走していく。アーチャーの弓を手に持ち、レイピアを変形させた矢を一本だけ放つ。多すぎるとセイバーに当たってしまうため、単発でしか援護できないのが痛い。

放った矢はセイバーを追い越し、襲撃者に到達する。流石に単発では怪我を追わせることはできず、持っている黒鍵で弾かれた。

そこへセイバーが斬りかかる。地形は悪いものの大きく踏み込んだ全力の一太刀だ。生身の人間ではいなせるわけが——。

「——ふっ。」

残像を残すほどの斬撃が、突如折れ曲がった。

「くっ、はあっ!!」

返す刃で二撃目を狙う。それは一步身を引かれたことで躲された。セイバーが振り切った直後の僅かな時間にバックステップ、再び距離が開く。俺は急いでセイバーの側についた。

そこで監督役が初めて口を開く。

「どういう見だ？セイバーのマスター。脱落をしてもいないのに、此処を訪れるとは。」

「ぬかせ、脱落しても保護するような場所じゃないだろ。」

「何を言う。サーヴァントに殺されないように保護はするとも。」

「で、そこをテメエが狩ると。」

「さてどうだか。」

監督役は凶体の大きな男だった。だが何があったのか、右腕の肘から先が無い。

「その腕はどうした。預託令呪とやらがあるんじゃないのか。」

「ほう、君もそれが目当てだったか。先日君と同じ考えの者が現れ、私の腕を切り落としていったのだ。実に手際が良かったのでな、反応する間もなく持っていかれた。そのせいで調子が悪くて二度も苦しませたことは謝ろう。」

「何が調子が悪いだ、化け物が。だったら何故他のマスターに召集をかけない。大方、そのマスターと結託してわざと令呪をやったんだろ？」

「大方などと根拠の無い中傷はよせ、セイバーのマスター。度が過ぎると監督役への敵対行為と見なすぞ?」

「チツ……。」

これは確実に黒だ。令呪の委譲に制限があつたか、もしくは本当に襲われたが許可したのか。

なんにせよ、生かしておくわけにはいかない。ここで確実に殺す。それがこの戦いのためにも、あの人たちのためにもなる。

「ああそう言えば、何故彼らを殺そうとしていたのだ?」

「何故だど？・テメエがほざくな。あれじゃあ治らないから、少しでも早く楽にしてやりたかったただけだ。」

「ならば止めて正解だった。自ら手に掛ける者たちの正体は知っていたほうが良い。普通の人間なら誰もが止めるだろう。」

漠然と嫌な予感がした。これ以上聞いてはいけなないと。喋る前に殺せ、と。

「兄弟を殺そうとしていたら、な。」

兄弟。自分にそんなものはいない。だから殺せ。コイツは可笑しな事を言っている。だから殺せ。早く、理性があつてまだ感情なしに殺せる内に早く、殺せ。

「あの火災を生き残った仲間だろうか？」

「もういい。黙れ。」

お前が俺達のことを口にするな。

「その絆は兄弟のようなものだと言ったが、違つたか？」

「黙れって言つてんだろツ……!!」

あまりにも多くの死に見送られ、地獄を生き残った奇跡。その奇跡を背負つて紡ぐ筈だった未来。

それを冒涇した男が嬉々として語る。何の悪夢だろうか、これは。

「ただ一人引き取られた衛宮切嗣の息子、衛宮士郎。」

ぷちん、と何かの切れる音がした。

「——この、クソ野郎がアアアアツ!!」

全力で殺す。

後の事など一才考えない。監督役？構うものか。こんな輩の何処に中立性がある。一般人を喜んで生け贄にする男だ。殺してしまつても何も問題はない。

——サーキット魔術回路、オーバードライブ励起状態。

身体中に淡い光が走る。尋常じゃない痛みが脳内をぐちゃぐちゃに掻き回した。

「シロウ、落ち着いて——」

「アイツはここで殺す。殺さなくちゃいけないんだ。」

——解析、対象設定、常時展開。

膨大な量の情報が頭の中に流れ込んでくる。そしてそれらは途切れることがなく、常に更新されていく。

対象は男の肉体。

呼吸、脈、全身の筋肉の収縮、その全てを理解し、一秒先の動きを予測する。

「投影——」

必要なのは、狂戦士の如き荒れ狂う暴力ではない。清廉な騎士の如き華麗な剣技ではない。

あらゆる猛攻をも撒き、それでいて敵を仕留める非才の剣の極致。

この身に流れる血が覚えている。あの陰陽の双剣こそが己に最も相応しい、と。

「——開始ッ!!」

## 第八話

### ガチ勢は流れ弾に気づかない。

「――投影、開始。」

陰陽の双剣を手に握る。

意識を敵に向けながらも、体は半ば慣れ親しんだ作業のように剣という媒体から剣技を取得する。そして、その瞬間に理解した。

やはりアイツと俺は同じだ。

同じ力があり、同じ理想があり、同じ限界があつた。それを確信できると、酷似している。

――同調率、七十九パーセント。

通常ではありえない。

如何に経験を読み取るとはいえ、結局は他人。共感し、模倣し、同じ剣を持ったところで完全な憑依などできるわけがない。日常的に行っていた縮地の鍛練でさえ、同調率は六十を上回ることはなかった。

だというのに、<sup>アーチャー</sup>アイツは違う。

向かってきた黒鍵を半身で避ける。

黒鍵の速度は先程の数倍はあり、威力は桁違いだろう。けれど全て見えている。

狙った箇所も。放つタイミングも。

そして、見えていればどうするのが最善かは分かる。弾く必要はないと、剣からダウンロードされた戦闘思考が結論づけていた。

足を前に踏み出して距離を詰める。

敵との距離はたったの十七メートル、すぐに接近戦に持ち込める。

奴は隻腕のようなものだ。手数が多い俺が圧倒的に有利なはず。今のところは。

たとえ先程のように見切られたとしても、次の動作を読めれば対応できるはずだ。

投擲される黒鍵を避けながら、縮地で接近する。後ろで爆音が鳴り響いた。あんなものが直撃すれば身体は粉碎されるだろう。避けた

際の風圧による裂傷はすぐに治るが、もしも当たって一発で死んだら治る治らないの問題ではない。

残り三メートルを切ったところで男が動く。

予測——対象、左に回避。

回避先を潰すように、すかさず自分も左にステップを刻んで横薙ぎに斬りかかった。

指と指の間に挟むように持った三本の黒鍵で防がれるが、それも見えている。鏢に引つ掛けることで力任せにその防御を固定し、もう一方の剣で黒鍵の間をすり抜けるように突きを放つ。

「死にやがれ……!!」

「ふ、まさか読まれているとはな。」

男はそれにすら反応し、身を逸らすことで回避する。まだ余裕があるらしい。

全身から力を抜いて一瞬で腰を落とし、体を回転させながら足払いを掛ける。

予測——対象、後方に跳躍。

それを待つていた。

人間のあらゆる運動は例外なく地に足が着いた状態から始まる。どれだけ速く動く者も地面を蹴ってはじめて前に進める。それ故に僅かであつても滞空する間は、男は動くことができない。

確かに男の跳躍も目で追うのがやつとな程に速い。だが、それは下策だ。剣を投げるのはお前だけではないということを教えてやる。

足払いの回転の勢いをそのまま腕に伝えて、もう一步踏み込む。

「——はあぁッ!!」

腕を千切れんばかりに振り切つて、双剣を投擲する。空気を切り裂いて、鶴翼を描くように双剣が男を追う。

「くっ……」

やはり空中で防ぐのは容易ではないらしく、苦悶の声を漏らした男は無理やり双剣を弾いた。けれど、それで終わりではない。

——壊れた幻想。

作り手である俺の命令に従い、弾かれた双剣は内包する膨大な神秘

を解き放って爆発する。それと同時に男の懐に入り込んだ。  
もう一度、手の中に双剣を作り出す。

「……これで、終わりだ……!!」

振り下ろした干将と莫耶が男の両肩から袈裟斬りにした。爆風で  
体勢を崩して斬撃を流すこともできなければ、超人の男も切られるし  
かない。

肉体から生々しい音がすると共に、まるで水風船のように血が飛び  
散った。

「……っ、は………。」

微かな呻き声をあげて、男は床に転がった。うつ伏せになって傷は  
見えないが、周りの床に赤い血溜まりが広がっていく。

流石に死ぬのだろう。

とりあえず解析の常時展開を解除する。男は起き上がる気配もな  
く、ただ倒れ伏すのみだ。しかし、何か腑に落ちない気もする。初撃  
であれほどの見切りをしながら、今の数度の攻防で敗れるものなの  
か。いや、殺せるとは思ったが、それでもこの男は死にそうにない  
も思っていた。

「セイバー、何か感じるか?」

「……いえ、何も。」

いくら待てども何も起こらない。考えすぎだろうか。ならば当初  
の予定通り残った片腕を貰うとしよう。その後に首を切り落とせば  
いい。

「……殺すか。」

横たわる男の死体の側に立つ。血溜まりが赤い鏡となって、酷い顔  
をした自分の顔を写し出している。

誰もを救うことはできないと分かっている、自分の無力さを恨ま  
ずにはいられないらしい。こんな情けない顔をしているのも無理は  
ないのか。

誰かの未来を守るためにはそれを奪う輩を先に排除しなくてはな  
らない。今回は間に合わなかったけれど、それでも次こそは――  
――。

見下ろす鏡に影が映る。

「——シロウ、上ですッ!!」

声に従って反射的に双剣を振り上げた。高速で落下してきた何かを防ごうとする。

「おせえよ。」

上げきる前に、干将の腹を紅い穂先に貫かれて漆黒の刀身が碎け散る。体が触れ合いそうな程近くに青い軽鎧があつた。

「な——」

考えてる暇はない、下がれ。

即座に近距離で薙ぎ払われた魔槍を、バク転で身を反らして何とか避ける。上着の腹部が穂先に触れただけで裂けた。

「へッ、やるねえ。」

さらに追撃として放たれた回し蹴りをやり過ぎたため、両手をバネに地面を押して、後方に飛び退く。同時に干将を投影して、残った莫耶と投擲することで牽制する。

着地すると直ぐにセイバーが前に出た。数メートルしか離れられていないが、追ってこなかったようだ。ナイスカバーだ、セイバー。

「ヒュー、いいぜ。今のは訂正しよう。悪くない動きだ坊主。」

「そりやどうも……ランサーが来るなんて流石に想定外だぞ。」

弾かれて戻ってきた干将と莫耶を掴み取る。

状況としてはまだ有利か。かなり魔力を消費したが、ランサーだけならまだ戦える。俺自身は無理だがセイバーなら押さえ込める。マスターを失ったランサーでは長時間はもたないだろう。

なら持久戦に——。

「そろ、さっさと起きろよコトミネ。」

「——な、に。」

男の骸が立ち上がる。いや、骸ではない。間違いなく生きている。

あの男は心臓も肺も斬られて、なお動くというのか。

「驚かせて悪かった、衛宮士郎。なにぶん、床の冷たさに感慨深いものを感じていたのでな。」

「……お前、どうやって生き返った。」

「どうもこうも私はそもそも死んでなどいない。そこそこ丈夫な体というだけだ。」

コイツ、まさか俺と同等の回復能力があるのか。だとしたら頭を潰すか、首を切り落とさないと死なないかもしれない。

ランサーの相手をセイバーがするとなると、俺が言峰の首を獲るということになる。けれど先程のは一度限りで、もう一度通用するとは考えにくい。しかも魔力も消費していて、魔術回路にもこれ以上の負荷をかけるのは不味い。

「ま、丈夫とかいう次元じゃないけどな。正直俺から見てもバケモンだぜ。」

「そんな話はどうでもいい。私が聞きたいのは衛宮士郎の願望についてだ。」

出来る限り早く殺したいが、その殺し方が分からない。態々待つてくれるというのなら、思いつくまでは時間稼ぎとして付き合っておく。

「俺の願望？そんなことを聞いてどうするってんだ。お前が聖杯を狙うなら意味がないだろ。」

「何か勘違いしているようだ。私は勝つつもりなどない。監督役として聖杯を得るに相応しい人物を見極めるだけだ。」

「貴様のような外道が勝者を見極めるなど、世迷い言をぬかすな……!!」

「だがな、セイバー。監督役を任されている者として、マスターの願望は知っておく必要があるだろう?」

「まだ監督役を騙るのか、貴様はツ!!」

この聖堂は地下空間だ。逃げ場は地上に続く階段しかない。ここぞで戦えば、ランサーの宝具を使われて確実に敗北するだろう。

けれど逃げるわけにはいかない。一度監督役に敵対した以上は、今

度こそ他のマスターに伝達がいつて結託されるかもしれない。だからここで殺すしかないのだ。

「……俺に願望なんてない。聖杯で叶えたい願いはない。この戦いで前回のような被害を出したくないだけだ。」

「それは矛盾しているぞ、衛宮士郎。お前の戦う理由があの大火災にあるのならば、聖杯にその抹消を願えばいいだろう？」

「……どういうことだ。」

「分からないわけではあるまい。聖杯であの大火災をなかったことにすればいい。そうすればやり直せる。失うはずではなかった平穏な人生を。」

いや、待て。ここが閉所というのなら。そうか、これは盲点だった。逃げ場が存在しないのは俺達だけでなく敵も同じだ。つまり切り札のぶつけ合いにならざるを得ない。

「お前も勘違いしているよ、言峰。」

「……なに？」

「俺は一度だつてあの日の出来事を消し去りたいと思つたことはない。大火災はあの時にもう起こってしまったんだ。だから、今更それをお前も勘違いしてはできない。」

「……」

そして切り札の質において、セイバーは最強だ。なにせ、放てさえすれば勝てるのだから。

「過去を変えるなんてしちやいけない。あの日に多くのモノを失つたけど、残されたモノもある。それらを背負うのが生きている者の義務だ。だから。」

——セイバー。

「そう、だからお前は許さない。」

——最小出力で聖剣を解放しろ。

暗い聖堂が目映い光に満ち溢れる。聖剣を包んでいた風の鞘が解かれ、黄金の剣が姿を現した。あまりの眩しさに思わず目を奪われる。

「ちい、こりや完全にマズったな。最初から宝具でぶち抜いとくべき

だった。」

「予想以上につまらない男だった、か。ランサー、何とかしろ。」

掲げられた聖剣に魔力が急激に収束していく。自分の体から魔力が失われる虚脱感に意識が朦朧となったが、双眼は聖剣を捉え続けることを望んでいた。

ずっと見ていたい、この光になら目を焼かれてしまっても構わない。あの剣は何処かで目にしたようで、けれど初めて見る美しさを感じる。

ああ。本当に綺麗だ、この剣は。できることなら命を対価にしても己の手で作りたいくらいに。

「約束された——」

一秒に満たない溜めが終わる。より一層力を込められた聖剣が更に輝きを増した。それは騎士の理想が形を為したと思えるほどに尊く、澄みわたっている。どれほど気高き想いを抱けば、このような煌めきを持つのだろうか。

今、セイバーが黄金の極光を解き放つ。

「——勝利の剣アアア!!」

視界が輝きに塗り潰された。目の前のあらゆるものが消えていく。理想がもった熱量は地獄だけを生み出してきたこの空間を尽く浄化する。

けれど、ふと見えた彼女の表情はどこか泣き顔のようである。――

全てが終わると、何も残っていないかった。仰々しく置かれていた聖堂のシンボルも、天井を支えていた何本もの柱も、その天井までも。開いた穴から青空が見える。十年間も闇に浸かっていたこの場所にもようやく光が届いたか。

あまりにも遅すぎるが、最期だけでももう一度空を見せられて良かったと思いたい。結局は自己満足に過ぎないと言われても。

「……セイバー。」

「私は彼らの処理をしてきます。シロウは魔力を消耗したでしょうし、休んでいてください。」

「……分かった、助かる。セイバーも無理するなよ。」

セイバーは目を合わせることなく、扉の先へ行つてしまった。何故、と正面から聞くほど莫迦ではないが、かといって思いあたる節もない。

いや、全く無いわけではないけども。言峰に啖呵を切った直後に不意打ちで宝具を使ったのが卑怯だったとか。ランサーとは一対一で勝負したかったとか。

もし本当にそうだとしたら、申し訳ないことをした。俺が我を忘れて突っ込んだ挙句、殺しきれなかったせいだ。

代わりといつては何だが、今日からセイバーの頼みはなるべく聞くようにしよう。失った信頼はきちんと取り戻さないと。

魔力を殆ど失って本格的に動けなくなつたので、俺は床に大の字に寝転がり、件のセイバーを待つしかなかった。

## 閑話 騎士王の湯浴みは長い。

己のマスターである少年、エミヤシロウは変わった魔術師だ。一度目の戦いでマスターであった男の息子らしいと分かり、最初は警戒していた。けれど私の知る限りでは、人の道を外れたような行いはしていない。

むしろ、私に信頼を寄せていて、戦闘のサポートをきちんとしてくれる辺り、相性は良いのだろう。

教会を襲撃するときも一応の筋は通っていたし、実際に監督役は異常だった。結果的には正解だったと言える。

それにサーヴァントとマスターを主従関係と捉えずに、個人として対等になろうとしている。

シロウは魔術師としては変わっている、つまり人間性は一般人のそれに近いのだ。

だから彼の過去を知ったときは、前回の戦いの爪痕を消す為に参加したのだと思った。

それが、教会の地下に囚われた者たちや戦争の被害で亡くなってしまった人々、そして他ならぬシロウ自身を救うことになるだろうと。

『過去を変えるなんてしちゃいけない。』

けれど、シロウは違った。

彼は自分の始まりとなった悲劇を受け入れていた。どんなに絶望しか齎さなかったとしても、起きてしまったのだから仕方がない。それを変えることはしたくない。

悲劇を嘆くよりも、悲劇が残したものを背負って前へ歩き出したのだ。

『だからお前は許さない。』

シロウの放った言葉は全てが私への糾弾に思えた。自らの不出来による滅びの結末を、奇跡によって歪めようとしている。そんな私の願いはシロウの想いとは真逆だ。

嫌だった。

彼の言うことは正しく、私のしようとしていることは単に逃げではない。過去の改変を為さんとする理由は、自分の望んだ結末ではなかったからという子ども染みだしたもの。

そこまで理解していて、それでもなお奇跡を求めてしまう自分が堪らなく嫌だった。

『……セイバー。』

ブリテンの滅亡を変えたい。けれど、それは決して褒められた願いではない。相反する二つの想いは胸の中で渦巻いている。

シロウに打ち明けたなら、失望されて前回の二の舞になってしまうかもしれない。そんな恐怖が一時とはいえ彼を遠ざけた。



「あ、そうだった。今日は家に帰るから商店街に寄っていくけど、何か食べたいものあるか？」

「食べたいもの、ですか……いえ、特には。」

「……あれ？」

シロウが動けるようになるまで待った後、教会を出て直ぐにそう言われた。

食べたいものと言っても、私は具体的に何か料理を知っているわけではない。いきなり聞かれても困ってしまう。

「あー、すまない。逃げちゃだめだよな。」

「くっ……!?!」

「料理を作る側として。……どうした？」

「い、いえ。何でもありませんとも。」

予想外の口撃が心に突き刺さる。

完全に不意打ちだったので、動揺を隠しきれなかった。無意識なのだろうが、気にしていることを本人に言われると辛い。

「でも後から変えろって言われても無理だぞ？何かあったら先に言うてくれ。」

「……シロウ。私には聞かなくて結構ですのー！」

「お、おう……何か変だな、セイバー。やっぱり怒ってるのか？」

「そんなことはありません！」

わざとか、これはわざとなのか。

もしやシロウは既に気付いていて、嫌味のように混ぜてきているだけなのか。

いや、まさかそんなキリツグよりも悪質な事をシロウがするとは思えない。きつと偶然だ。今までののは全て料理の話だったに違いない。

「えーっと、じゃあ今日は刺身にでもするか。さっぱりしたいし……肉はちよつとキツイからな。」

それにしても、刺身。確か海の幸を生のまま食べる料理だったはず。当然だが私は一度も口にしたことがない。ブリテンではそういう文化は無かったから、少し楽しみではある。

「何がいいかな。うーん、マグロとか——」

……我ながら現金な人間だ。先程まで空気を悪くしていたというのに。気を遣って話を振ってくれたシロウに申し訳ない。

「——タコとか。」

「——それはやめて下さい。」



湯船に浸かり、瞳を閉じる。静寂な場所で一人になると思索に耽りたくなるものだ。悩むことの多い今は特に。

——どうするべきなのだろうか。

私はどんな奇跡にすがってもいいと思える願いがあある。その願いを叶えるために、二度も同じ場所で行われた聖杯戦争に参加したのだ。

自らが治めたブリテンという過去の王国。その滅びの運命を変えたいと参加した一度目の戦いでは、同じく参加していた他の王たちに願いを否定された。貴様のような王は暗君であると。暴君よりも質が悪いと。

ならば彼のヴォーティガーンの方が正しかったとでも言うのか。ありえない。民を苦しめる存在でしかない暴君が許されるわけがない。

しかし、彼らの言い分にも一理ある気がした。

私が王に相応しくない、という点だ。

真に理想の通りの王であつたならば、なるほど、国が滅ぶ事態などないかもしれない。騎士が反逆を起こすなど考えられないに違いない。

運が良いのか、悪いのか。一度目の戦いでは裏切りの騎士本人が狂気を纏つて参戦していた。その決着の末によく気づいたのだ。

私が王になってしまったから。私が選定の剣を引き抜いてしまったから。それこそが滅亡の始まりだとしたら、自分がもう一度やり直すという選択肢は無くなる。

この身が国を滅びに導いたなら、どうして二度目を望むものか。願うべきは王のやり直しではない。選定のやり直しである。

——そう、信じていた。

結局、今はそれすらも揺らいでいる。たった一人の少年の言葉によつて。

何と言うのだろうか、この感情は。惨め、ではない。しつくり来るのは情けない、だろうか。時代も立場も比べられないほど違うけれど、彼を見てみると自分が情けないと思う。

シロウは全てを失った後に再び前を向いて歩き出した。それなのに、私は。

「後ろを向いてばかり……か。」

だからこそシロウの言葉が痛いのだろう。過去を悔やむ私には彼が眩しすぎる。あるいはかつての自分を見ても、私は眩しく思うのだろうか。

——全く、いつからこんな性格になったのだ。

いや、私に性格など無かったか。王になったその時から、人としての心を捨て去ったのだから。

ならば私が心の無い王になったのは間違いだったのか。

「……これでは堂々巡りだ。」

最初から一歩たりとも考えが進んでいない。これでは何のために悩んでいたのかも分からない。どうやら自分だけでは解決しそうになかった。

もう風呂を出よう、と浴室の扉を開ける直前に。

控えめなノックが聞こえた気がした。

「おい、セイバー？もしかして何か困ってた、り……」

二つの扉が同時に開く。

目の前に特徴的な白髪が現れた。

お互いが真正面から向き合っているため、必然的に目が合う。見ると、シロウは鋼色の瞳を見開いて固まっていた。段々と顔が赤くなっている。

戦闘時は冷静なのに、私の貧相な体を見たぐらいで慌てるとは。意外にうぶな一面が少し可愛らしい。

「えっと、あ、な、何て言うか……本当に、すいませんでしたああああ!!」

動き出したかと思ったら、素早い動きでドアを閉めようとした。良い機会だ。伝えておきたいことがある。

ドアの隙間に足を滑り込ませ、逃げようとするシロウの腕を掴む。引き攣った顔を浮かべるシロウに、落ち着くよう微笑んだ。

「話したいことがあるので、明日の朝は道場に来て下さい。」

やはり悩むよりも何か行動した方がいいに違いない。どうせなら、いつそのこと打ち明けてしまおう。そう決めた故の咄嗟の言葉だった。

手を離すとシロウは謝罪の言葉を口にしながら走り去っていく。

ふと時計を見ると、入浴し始めてから一時間半近く経っていた。それでシロウは私の様子を確認しにきたらしい。

「…………ふふ。まったたく。」

毎度毎度、気は利くの間に間が悪いマスターだ。

## 第九話

ガチ勢は修羅場になっても諦めない。

とある国に一人の少女がいた。

どうやら、その少女は生まれ落ちた瞬間から道が決まっていたようだ。

望まれるがままに己を磨き。

言われるがままに剣を振るう。

少女はよく理解していなかったが、不思議とそうあるべきだった気がした。そうありたいときえ思っていた。

ある日、兄に連れられて向かったとある丘。

独り残った少女はその頂きにあった剣を掴む。

一度抜けば引き返せぬ、どこからか現れた魔術師にそう言われた。

それがどうした、と力を籠める。

良く考えろ、そう言った心配そうな声は心の内で嗤っているのだからと少女は思った。

それでもいい。

多くの者達が笑顔でいれるのなら。

それが己の望む未来だから。

——  
剣に光が満ち溢れた。



身を刺すような冷たさで目が覚める。

「……………今のは、夢か」

曖昧なものだったが、それでも何を見ていたかは覚えている。見たことのある、というかよく知っている顔だった。

間違いなく、今の夢はセイバーの過去。

アーサー王として円卓を纏めあげる前の、まだ幼い時期だった。王を選定されると言われる剣、つまり勝利すべき黄金の剣を抜く場面はやけに鮮明だったが、おそらくセイバーの中でも印象に残っているんだろう。

皆が幸せな国にするために王になる。望まれた理想を体現する。生半可な覚悟では決して成しえないことだ。

けれど、それをセイバーはやってみせた。戦いに勝ち続け、国を広げて、理想の君主であり続けた。

まさに高潔な騎士の王だった。

……まあ、随分と可愛らしい外見ではあったが。夢の中の容姿から変わっていないところを見るに、あの時に不老になったらいい。大人になればどうなっていたのか。

その、こう、気になる部分があるじゃないか。

……いや、やめておくか。知られたら怒られそうだし。

「んー、今日は一段と寒いな」

それにしても、カリバーンは本当に綺麗だった。あれが、本物の聖剣。王を選定するという逸話に相応しい神々しさを纏った剣だ。

正直言つて、あの美しさに惚れた。昔から剣には惚れ込みやすかったが、今回は格別だった。エクスカリバーと比べても甲乙つけがたい。

俺が鞘の記憶から作り上げた紛い物は、あんな光を放ってはいなかった。アレは形状しか合っていない、中身のないハリボテだ。宝具になるか、ならないか。ランクとしてもEーが精々だろう。

日々改良を重ねてきたが、体へのダメージが増えるばかりでマトモな物にならなかったのだ。カリバーンを目にしたお陰で、設計図はキチンと頭の中で浮かんでくる。

まさか夢に見るだけで投影できるようになるとは、俺も想定していなかったが。あれほどの神秘をもった武装が選択肢に入ったのは大きい。

それにしてもカリバーンで二刀流とかできないだろうか。セイバーが二刀流で戦ったこともあるなら模倣することも可能なのだが。………何か、『皆にはナイショだよ!』とか言いながら闇討ちしてそう。

「——つて、ヤバっ。セイバーから道場に呼び出しくらつてたんだった!」

十中八九、昨日の件だ。あの最後のイイ笑顔からすると、オカンムリになられている可能性がかなり高い。

一先ずどうなるかを予想してみよう。

——王たる私の肉体を直視するとは何事か、即刻打ち首です。

うーむ、これは流石に無いか。いくら怒っていても、これは無い………無いよな?

——シロウ、謝罪するなら料理を。この私を満足させたならば不問としましょう。

これだ、これこれ。セイバーが要求するといえばご飯だよな。これなら手間と食料がかかるだけで済むからありがたい。

——修行しましょう、シロウ。まずは真剣で。話はその後です。

……あれ、これも割とありそう。そのまま事故に見せかけてグサツと、それはもう思い切りグサツと。

セイバーは微妙に難しい所があるから、どう出るか分かんないぞ。昨日の刺身のタコも猛反対されたし。美味しいのにな。今度、酢漬けで出してみようか。

「……つて、だから急がないと!」

一応は動ける服に着替えて、急いで道場に向かう。殊更に冷たい空気が身に沁みた。

「すまん、セイバー。少し寝坊し、て……」

予想外の光景に我を忘れる。頭が思考を停止した。何と言え

いのかも分からず、ただ空気だけが喉を駆け上がった。

「——うそ、だろ」

鎧を身に纏った相棒。

彼女は不可視の剣を両手で構えており、その碧眼で俺を見据えていた。

尋常ではない殺気がこの身を貫いている。どうにか一言だけ発することができたが、状況は何一つとして進んでいない。

何故、どうして。同じ単語が頭の中で繰り返される。

「——こちらへ、シロウ」

無意識のうちに、腰を低くする。いつでも動き出せるように身体が反応していたようだ。

「……………あ、あのさ」

まさか、本当に俺を殺すつもりなのか。

俺が言うのも何だけど、あんな事故みたいな物で死刑が確定してしまったのか。少しぐらい弁明の時間があってもいいんじゃないだろうか。

何でもいい、とにかく今は喋らなければ。

「待ってくれ、セイバー。話せば分か——」

「話している暇などありません。早くこちらに！」

「なん……………だと……………？」

聞く耳持たず。

即却下とは思わなかった。じつとこちらを見つめたまま、剣は欠片もブレはしない。間違いなくセイバーは本気だろう。

どうすればいい。何をすれば斬刑を回避できる。聖杯戦争の死因が自分のサーヴァントの全裸を見て殺された、では死んでも死にきれない。切嗣にも顔向けでき、な……………？

そうだ、切嗣だ！ 切嗣が言っていた。大体の女性問題は問題そっちのけで、誉めれば解決するって。

そうとくれば褒め殺ししかない。ひたすら褒めまくることで、相手

の機嫌をとると同時に罰を与えにくくさせるテクニクだ。

頼む、切嗣。今こそ女たらしの力を貸してくれ！

「前から思ってたけどセイバーって綺麗だよな少しスレンダーかもしれないけど全然気にすることないぞそもそも不老の加護があるからそれ以上成長しなかったのは仕方ないむしろ可愛いと思っただし正直に言えば最高だった美しいとか守りたいとか色々思っただけど一番思ったのはやっぱりセイバーって綺麗だなって」

「——ああああのシロウ!? 何を、いきなり何を言っているのですか貴方は! そんなことより、早く私の方へ来て下さい!!」

駄目だったんだけど。

ヤバい、かなり恥ずかしいことまで言っただけど全部流されたのが更に恥ずかしい。穴があったら埋まりたいとか、そういうレベルだ。これだけでまた怒らせたかもしれない。

というか、剣を構えてる方に早く来いって言われても行けないぞ。「ゴメン、もう普通に謝るから許して下さい。昨日の事は悪かった。だから殺さないでくれると助かる」

「昨日の……? いえ、そうではなくて! 敵のサーヴァントが接近しているのです!」

「……え、サーヴァント?」

……もしかして、セイバーが武装していたのはサーヴァントが近くにいるから? 張り詰めた殺気はどんな敵襲にも対応するため? 近くに来いっていうのは俺をなるべく側で守ろうと?!

もしかして、いや、もしかしなくても。

「——今までの話、全部違ってたのかよ!!」

「ですから違うと言っていたでしょう!」

「剣を構えながら近くに來いって言われても、行けるわけないだろ！  
斬られると思っただぞ！」

「斬りません！シロウは私を何だと思っているのですか！」

このままでは埒が明かない。とにかく、今は武器を持たなくては。  
敵が近くににいるのなら、あまり悠長にしている暇も――。

「ねえライダー。行方不明になったと思ったたら普通に戻って来ていた  
先輩が大声で痴話喧嘩してる時って、どうすればいいかな？」

「嘲笑えばいいと思いますよ、サクラ」

――もう、いた。

「……桜？」

「三日ぶりですね、先輩。突然いなくなったので心配しましたよ？あ、  
この子はライダーです。」

可笑しな事は何もないとでもいうように話しかけられても、どう返  
せばいいのか分からない。

武装しているセイバーを見ても全く驚かず、ライダーを連れてい  
る。

これって……桜がライダーのマスターだった、ってことだよな。何  
でこんなに親しげなんだ？今、敵と向き合ってるという状況で友好的  
にする意味は？

「シロウ、あのマスターは？」

「前に話した後輩だ。今のところは敵、のはず」

桜の戦意が微塵も無いことにセイバーも少し困惑している。ライ  
ダーも全く動く気配がない。そもそもライダーは武装もせず、私服の  
ラフな格好のままだ。

「何かとっても警戒されてるよ……」

「敵とまで言われてますよ。このままでは戦闘になるかもしれません  
が、どうするのですか？」

「どうするって言われても……。先輩と戦うつもりは無いんだけど

なあ。むしろ一緒に戦いたいです！ 先輩、同盟を組みましょう！」

名案を思いついたとばかりに、そう言い放つ桜。正直、不審でしようがない。突然現れて、微塵も戦意を見せず、あまつさえ同盟を提案してきた。

俺が召喚した次の日は何もコンタクトを取ってこなかったのに。

罨の匂いしかしないぞ。長い付き合いから、桜が良い奴だと知ってはいるのだが……。表の顔をそのまま信用して良いのかどうか。

「セイバー、どう思う？ 急で悪いが、状況が状況だからな。クラスだけを見るなら、機動力のあるライダーは同盟相手として相性が良いとは思うけど」

「クラスはそうですが……。あのライダーのマスターは信用できるのですか？」

「……まあ、多分。同盟を途中で破ったりはしない、と思いたい」

「え、先輩？ 何で自信なさげなんですか!? そこは堂々と言ってくれないと、セイバーさんに信じて貰えませんよ！」

「随分と彼からの好感度が低いみたいですが……。サクラと彼ではお互いの認識がかなり異なっていますね。イベントはキチンとこなしましたか？」

「おい待て、イベントって何だ」

駄目だ、場が混沌としてきた。これではまともに会話が進まない。

あちらが全く緊張感を感じさせず、桜とは見知った仲ということもあつて空気が緩んでしまっている。

ここは場所を変えるべきだろう。

「まあ、桜たちに戦う気が無いってことは分かった。ひとまず居間に行こう。詳しい話はそこでするから」

「はい！朝ご飯ですね！」

「……………はい？」

話が噛み合っていない事に俺が固まっていると、目をシイタケのように光らせたセイバーが高速で歩み寄ってきた。

「どうしたのですかシロウ早く行きましよう早く」

「……………何でさ」

## 第十話

ガチ勢は相棒しか信頼しない。

「え、神父さんってランサーのマスターだったんですか?」

「ああ。だから今、聖杯戦争の監督役はいなくなってる」

「それなら後で姉さんにも知らせておかないといけませんね。土地の管理者が知らないのは不味いと思いますし」

「……ちよつと待ってくれ、桜に姉っていたか?」

「はい。遠坂凜は私の姉ですよ」

「遠坂が姉だって!?!」

「私は間桐の家に養子にとられたので苗字は違いますけどね」

「……そうだったのか」

知らなかった。

あの遠坂と桜が姉妹だったなんて。髪の色が全然違うから、そんなこと思いもしなかった。

似てる所があるといったら……性格?二人とも結構はつちやけるしな。テンションが高くて、わりと天然が入ってる。

「あ、それとサーヴァントで真名が分かってるのはバーサーカーとランサーだけだな」

「ランサーはクー・フリーンさんですよ。バーサーカーの方は私達はまだ遭遇してないです」

「たぶん、ライダーだけで出会ったら死ぬぞ。アレ、ヘラクレスだったから」

「……………え?」

「Aランクの攻撃で十二回殺さないと死なないらしい。一回喰らった攻撃には耐性を持つ、とも言ってたな」

「はい、マスターを殺るしかないですね」

「俺もそう思ってた」

仮に他の六騎が協力して、かつそれぞれがAランクの宝具を持っていたとしてもたったの六回。半分でしかない。それぞれがAランクの宝具を二つずつ持っていた場合のみ、丁度殺しきれる算段がつく。

それも、全ての宝具でヘラクレスを相手にきつちり一回ずつ殺せたとして。

どう考えても理不尽だ。その様は、魔王に挑む勇者御一行。その魔王が世界で最も有名な勇者というのが皮肉な話だが。

「じゃあ、私からも一つ。学校に張られている結界についてです」

「そういえばあつたな、結界」

「アレを張っているのは情報から推測するにキャスターかアサシン、アーチャーですが、姉さんはしそうにないので、やはり前者二つが可能性としては濃厚だと思います」

そうだろう。遠坂は決まった場所で待つようなヤツじゃない。もっとフットワークが軽いタイプだ。そもそも、あの結界の規模が魔術師には不可能な大きさだし、アーチャーも結界を扱うような英霊じゃない。

本当にアーチャーが俺の祖先だというのなら、結界を使えないのは俺が保証する。投影や強化じゃない魔術は解析みたいな構造把握しかできないからな。

「どんな種類のやつか分かるか？」

「ちよつと見た感じだと、内部に閉じ込めて強力な効果を発揮するものとか」

「そうか。まあ、サーヴァントの結界がそんな簡単に見破れるモノなわけないよな」

中々に面倒だが、こちらにはAランクの対魔力をもつセイバーがいる。キャスターが相手でもアサシンが相手でも、結界のせいで押されることはあるまい。

「では同盟は組んで貰えますか？もしそうなら私達はいつでも先輩たちに合わせられますよ」

「そうだな……」

考えつつもセイバーの方を見ると、俺と目を合わせて頷いてくれた。どうやらセイバーも信じられると判断したようだ。

……若干、顔が赤く見えるのは気のせいだろう。ついでに俺の頬が熱いのも気のせい。

「よし、これからよろしく頼む。結果は今日の夜に行こう。それまでは自由行動で」

「分かりました。パパッとやつつけちゃいましょう!」

「あ、そういえば。先輩っていつから女性に積極的になったんですか? さつきはセイバーさんを凄い内容で口説いてましたけど」

「……………ノーコメントで」



「……………」

「……………」

場所は変わり、再び道場である。

桜たちは間桐の屋敷に戻ったので、朝のうやむやになってしまったセイバーの話のために、戻ってきたわけであるが。

「……………」

「……………」

お互いが正座で向かい合った後、喋らないまま十五分が経過している。

二人の間の真ん中辺りの床を見つつ、少しだけ相手の顔を盗み見ている。は目が合うということを繰り返していた。

「……………(何してるんだ、俺は! この気まずさの原因はどう考えても朝のアレだろ! 俺が何とかしないと…………でも、何て言えばいいんだ? ご馳走さまでした? いや、これは不味い。流石に俺でも分かる地雷だ。クソ、なるべく穏やかに解決する方法は無いのか!?)」

「……………(どうするべきでしょうか。昨日思った通りに叶える願いについて話そうと思っていたのですが、朝の一件に触れないのはあからさまに過ぎる。しかし、私から話し始めるのは難しい…………というよ

り恥ずかしいに決まっている！ ああもう、シロウは何ということ  
を口走っていたのですか!!)」

内容が内容だけに、二人とも最初の一言を言い出せずにいた。

この沈黙を破るのには勇気がいるが、覚悟を決めて俺から話を切り  
出す。

「……えーと、その、だな。セイバーの話つてのは昨日の夜の……アレ  
か?」

勇気はなかった。

「い、いえ。全くの別件でした。私は特に気にしていませんでしたか  
ら」

「そうか……」

「……ですが、いくら私が女らしいことに疎いとは言っても限度があ  
る。

朝のような台詞は、その……は、恥ずかしいので止めて欲しい  
……」

まずい、可愛いすぎる。こんなの卑怯だ。

いつもは凜としたセイバーが、頬を朱色に染めて目を逸らしてい  
る。普段の彼女からは想像できない程のしおらしさだ。見てる此方  
も顔が赤くなってくる。

今はセイバーが俯きがちだから見られていないが、もし顔を上げた  
ままだったら少しニヤけているのがバレていただろう。

何故、人は可愛らしいものを見ると口許が緩んでしまうのか。興味  
深い謎である。

「昨日の夜といい、今日の朝といい、本当にすまなかった。ただ、悪気  
はなかったんだ。セイバーが心配だったから様子を見に行こうとし  
ただけで」

「……ええ、士郎が邪な思いで行動したのではないことは分かっ  
ていました。ですから、この話はここまでにしましょう」

「良かった。ありがとう、セイバー」

気まずい雰囲気も薄まって、いくぶん話しやすくなった。色々な事故があつたとはいえ、変なことを言ったのは自分だ。許してもらえたことに感謝するべきだろう。

すぐにセイバーが居住まいを直し、俺もおのずと背筋を伸ばした。

「では、本来の話ですが。実は私の願いについてなのです」

「それは聖杯にかける願いつてことだよな？」

「はい」

これはかなり真剣な内容だ。

セイバーなりに俺のことを信頼してくれて、話してみる気になつたんだろう。心して聞かなければいけない。英雄の願いが軽いわけがないのだから。

彼女は静かにこちらを見つめた。

「私の願いは、”選定のやり直し”です。選定の剣を抜いた、あの瞬間から全てをやり直して私よりも優れた王を選出する」

選定をやり直す、か。

「シロウ、貴方はどう思いますか？」

「……」

落ち着け。セイバーは教会で俺が言ったことを聞いていた。俺が間違つてると思つたのなら態々こうやって話す必要がない。

意見を求めたのは自分の願いに自信が持てなくなつたから。正しいのかどうか迷っている自分を納得させて欲しいのだ。

これはつまり、初めてセイバーに頼られたってことか。なら、全力で応えてやりたいと思うのは当然のことだろう。

よし、決めた。

「まず俺の意見として言うけど、セイバーの願いは裏切りだと思う」

「な、私が裏切り……？」

「そうだ。騎士たちはセイバーを王として信頼していたから一緒に

戦ってくれたんだろ？」

「ですが最後には分裂して、あの丘で戦いにまでなってしまった」

「——だからこそだ」

分からない、という表情で俺を見るセイバー。気高い理想を抱いた彼女は完璧を望みすぎている。全てを救おうと、救わなければならぬと思ひ込んでいるのだ。それを伝えなくては。

「カムランの時もセイバーに付いてきてくれた騎士たちはいた。なら、そいつらがセイバーに忠誠を誓ったことを、セイバーが一方的に無かったことにするのは裏切りじゃないのか」

「確かに……そうですが。私が王としてふさわしくなかったから、不快感を募らせてしまった者もいた。私よりも優れた王だったなら、彼らは……」

「じゃあ聞くけどな。セイバーは誰も幸せにすることができなくて、居るかどうか分からないセイバーよりも凄いヤツだったら皆を救えるって本気で思ってるのか？お前を信じた騎士はソイツの方が良かったって言ったのか？」

「それは……」

事実上カムランの戦いで円卓は完全に崩壊した。だが、重要なのは”戦い”であったということだ。暗殺でも何でもなく、戦い。それは相当数の仲間がいたことを意味している。

戦死した騎士もいただろう。一生残る怪我を負った騎士もいたに違いない。しかし、彼らはアーサー王を信じて、かつての同胞たちを討つために剣を取った。

だというのなら、王が悔やんでどうするのだ。

「十の内の一が溢れ落ちたからって、その手で掴んだ九も手放すのは間違ってる。色んな失敗もあったかもしれない。

けど、セイバーに救われた人は多かつた筈だ。セイバーが王だったからこそ共に戦ってくれた仲間もいただろ。だったら、その信頼から逃げないで胸を張れって」

「……私が救えた人々。考えたこともありませんでした。いつも、取り零した者達だけを見ていた」

全てを守りたいと思うほどに守ったものを見失ってしまうのだろうか。

——昔、同じような人を見たことがあるからすぐに分かった。セイバーも彼も、理想が尊すぎるからこそ求める結果に上限がないのだ。どれほど『最善』を重ねてもまだ足りない、届かない『完全』に手を伸ばした。

積み上げた山には目を向けず、転がり落ちる一握りだけを見続けた。それらを全て拾おうとして、余りにも小さい自分の手に絶望した。

ならば、次こそは拾いきってみせると挑み続け、その果てに己では不可能だと悟った。矮小に過ぎる自分に諦観の念さえ抱いた。

そして。

遂に奇跡を求めた。自らの過去を否定するとは思ってもせずに。

「どんなに悲しきや絶望に押し潰されそうになっても、決して人は折れない。また歩き始めるさ。俺が過去の改竄を聖杯に願わないのは、そういった過去を乗り越えた人たちの覚悟を無かったことにしたくないからだ」

十年が経過した今では大火災の見る影もないほど街は元通りになり、むしろ前より発展している。しかし、それは過去が忘れ去られたからではない。過去から逃げたからではない。

絶望の淵に立ち、それでも明日に希望を見出だした、その証なのだ。「セイバー、自分の努力を認めてやってくれ。最初の理想には届かなかったけど、多くの人々を救おうと戦い抜いたのは間違いなんかじゃなかった——そう誇れるはずだ」

これで俺の伝えたいことは言いきった。

かなり偉そうなことまで口にしたが、ほとんど本心に近い。セイバーが幸せを掴めるのを心の底から望んでいるからこそ、言わないわけにはいかなかった。

だって、夢で見たセイバーはあんなにも明るい未来を信じていたのに、終わってみれば後悔しか残らないなんて嘘だ。

それではセイバーが報われないだろう。必死に駆け抜けた人生を

自分で否定するなんて見ていられない。血を吐くような努力には意味があったのだと思えるようになってほしい。

こうも願ってしまうのは、きっと彼にも同じような……。いや、今は自分よりもセイバーだ。

後は彼女次第。どうにか思い直してくれると良いのだが。

内心、かなり緊張して反応を待っている。セイバーが遂に口を開いた。

「——シロウ、貴方の想いは心に響きました」

彼女は穏やかな微笑みを浮かべている。そこには後悔を振り切った清々しさ、肩の荷が降りた解放感があった。

どうやら自分は望まれた役割を果たせたらしい。

「そうか……良かった、本当に良かった。相談役を請け負った甲斐がある」

「ええ、貴方に感謝を。私一人ではこのような結論には辿り着けなかったでしょう。誤った願いを抱き続けていた未来もあり得た。

……まあ、印象を聞きたかっただけで、説得までされるとは思っていませんでしたが」

何と。

てつきり踏ん切りがつかない所に、最後の一押しが欲しいのだろうと思っていたのだが。とんでもない迷惑野郎だった可能性が浮上してきた。

「もしかしてセイバーに余計なことをしちまったか？」

「まったく、『感謝を』と言ったでしょう。恩を覚えるこそすれ、鬱陶しがるなど騎士の矜持に関わりません……ですが、そうですね。どうしたものでしょうか」

「どうしたって、何が？」

思案顔を浮かべるセイバー。もしか、まだ苦悩を抱えているのだろうか。

「いえ、選定のやり直しという願いを捨てたので、この戦いに勝利した

暁には何を願えば良いのだろうか」と

「あ……いや、他に何かないのか？ したいこと、会いたい人、何でも良いんだぞ？ 新しい人生を歩んだり、肉親や親友とかと一緒に過ごしたりもできるし」

その言葉を聞いた瞬間に、セイバーの目が闇のように暗くなった。「肉親で話せるのはサー・ケイぐらいですが、彼にはすげなく断られそうですね。気の置けない友など、私には居ませんでしたし……」

「え、ごめん悪かったから元気出してくれ！ セイバーがそんなだったって知らなかったんだ！」

「王は、人の心が……分からない……」

「セイバー、どこを見てるんだ!? セイバーアアアア!!」

巧妙に隠された地雷を踏み抜いたために、王が過去トラウマの部下に打ちのめされて世界の裏側に旅立ちかけた。が、暫くすると正気に戻ってきた。

「まあ、簡単に言えばセイバー自身が幸せになれることを願えば良いんだよ。平行世界に行ってみたいとかの、自分の力では絶対にできない叶えたいこと」

「……やはり、急に言われても思いつきませんね。今まで考えたこともなかったの」

「じゃあ、これからゆつくりと考えていこう。聖杯戦争が終わるまで時間はあるし、セイバーが幸せになれるように俺も手伝うからさ」

セイバーにはこれまで頼ってきたし、これからも頼ることになるだろう。それをこういう形でも少しずつ返していきたい。

お互いが足りない部分を補ってこそ、真の相棒たりえるのだから――

ゴギョルルルル。

あ。

「……」

「よし、良い時間だし昼飯にしよう。あ、セイバーってお腹減ってるか

？ 俺も”腹が鳴る”くらい空いてて——」

「……（チャキッ）」

「え、セイバー？ ちょっと待ってくれ今のは良いフオローではあり  
ませんでしたかダメですかそうですかそうですよネー!!!」

「シロウ、覚悟ッ!!」

この後、めちやくちや修行した。真剣で。

## 第十一話

ガチ勢は古参勢とすれ違う。

「皆、準備はいいか？」

「問題ありません」

「はい。大丈夫ですよー」

「同じく」

深夜十一時。

学校から四百メートルほど離れた民家の屋根の上に、俺たちはいた。強化した目で観察すると、確かに以前よりもかなり強力な結果となっているようだ。学校の輪郭が僅かに揺らいでいる。

結界の手の込みようから、やはりアサシンではなくキャスターだろう。アサシンは山の翁、つまるところハサン・サツバーハの内の誰かが召喚されるのだが、これほどの魔術の手腕を持つ者がいるとは考えにくい。

「じゃあ作戦通りに。セイバー、頼んだ。不利だと思つたら直ぐに引いてくれていいからな」

「分かっています。では」

最初こそかなりの違和感を抱いたものの、今やすっかり見慣れたスポーツ少女である。青いマフラーをたなびかせて、セイバーは連なる屋根の上を八艘飛びの如く跳躍していった。

「桜もライダーも行ってくれ。俺が合図したら突入だぞ」

「キャスターが出たら任せてください！派手にやっちゃいますよー」

続いて、桜を抱えたライダーが道路に降りて疾走していく。その速さは明らかにセイバー以上だ。流星は騎兵と言ったところか。

彼女はセイバーが突撃した後の第二波、つまり援軍を頼んでいく。結果の効果を確かめて、安全が確保された後にセイバーの加勢に行ってもらう方がいい。

俺は弓を投影する。

桜たちに合図するためだけではない。準備万端で敵が待ち構えている可能性があり、そうなったときにはセイバーを即座に援護する必

要があるのだ。

お馴染みの大きすぎる黒弓を左手に握ったまま、右手に意識を集中させる。

二十七の魔術回路を起動。

「――投影、重装」

基本骨子。

創造理念。

構成材質。

製作技術。

成長経験。

そして、蓄積年月。

普段ならば省略する工程を丁寧カットに踏んでいく。命のやり取りに於いて、手を抜いていい場面などない。これは切嗣に教えられたことだ。

ただ、可能であるとはいえ高ランクの宝具の投影。夫婦剣とは比較にならない程の痛みが襲う。余りにも大きい負荷に魔術回路が悲鳴を上げているのだ。

――ぐじゅ、と肌が染まる。

神経に針を直接刺すような激痛で集中が途切れかけた。

不味い。制御できない魔力は体内で暴走し、魔術回路を食い破るだろう。そうなれば命すらも危うい。

なればこそ己の中に埋没する。

激痛が妨げとなるのならば、痛覚を遮断する領域まで意識を落とす込む。

剣を夢想し、設計図を手繰り寄せ、衛宮士郎を表す呪文カタチの一つを刻む。

「I am the bone of my sword」

そして、夢想は剣となった。

右手に掴むのは偽・螺旋剣Ⅱ。

現状、最も純粋な威力が高い攻撃手段であり、余程のことがなければサーヴァントを致命傷まで追い込むだろう。

アーチャーは一撃でヘラクレスの命を一つ削った。ならば、同じ能力を持つ俺も近い結果は出せるはずである。少なくとも理論上は。

『シロウ、十秒後に突入します』

「了解。こつちも準備はできてる」

先行するセイバーから連絡があった。もう結界に到着したらしい。急いで黒弓を構えて、けれど冷静に狙いを定める。

当然だが普段の俺では四百メートル離れた人間を精密狙撃などできない。遠坂とやりあった時は比較的近距离だからできたけれど、どんなに鍛えていても巨大な剣——矢のような形状にはしているが——で遠くの物を狙える人間はいない。

だが、まあ。

「偽装項目：筋力、及び視力——複製、完了」

人ならざる者ならば話は違う。

「ふ——ッ!!」

急激に増大した力で以て、弦にかけた螺旋剣を思い切り引いた。ギィ、という心地良い音を立てて黒弓がしなった。

同時に、内包する神秘を底上げするために螺旋剣をチャージする。腕を、手を、指を伝わって魔力が剣へと蓄積されていった。

「……………一、一、零」

アーチャーには劣るものの、研ぎ澄まされた眼で彼方を見遣る。そこには揺らめく結界の境界を踏み越えるセイバーの姿があった。

『——これは……………』

『どうしたんだ？敵はいないのか？』

『いえ、いるにはいるのですが。既に先客が来ていました』

「先客？」

『アーチャーのマスターがサムライのサーヴァントと戦闘しています。』

「……………何でさ」

アーチャーのマスターは遠坂だ。それはこの前の戦闘で判明している。だというのなら、遠坂が戦っているその侍は何なんだ。キャスターではないとすると、消去法でアサシンしかない。

侍がアサシン？あり得るのか、そんなことが。そもそも日本の英霊は召喚できない筈だろう。

……まあいいか。どんなサーヴァントでも倒すしかないんだから。「取り敢えず見た感じはどうなんだ。一方的なのか？」

『いえ、膠着しています。サムライの刀による攻撃は彼女には効果がない。ですが、彼女の動きはサムライに見切られている。』

……む、どうやら私を認識して戦闘を中断したようです』

「お互い本気じゃなかったって感じか……結界の効果は？」

『特には。結界の外から内部を見れないようになっていてるだけです』  
限りなく低い可能性としてはアサシンの侍が隠蔽の結界を張った、ありえそうなのはサーヴァントが別にいる、そのどちらかだろう。

今できる最善策はセイバーがアサシンを下し、遠坂を確保してアーチャーを引きずり出すことだが――。

『――そこか』

突然聞こえたセイバーの声。

「何があった？」

『新たなサーヴァントが背後から奇襲してきました。恐らくキャスターですね』

出てきたか。

やはり結界を仕掛けたのはキャスターというのが濃厚だな。もう少し早く出会えていたら違う未来もあったかもしれないが、今となつては意味のない想定だ。

「やれそうか？」

『少し難しいですね。転移を使用できるようなので、追い詰めても逃げられるでしょう』

「そうか……」

転移魔術が使えるとなると相当高位の魔術師だ。キャスター下手したらセイ

バーの対魔力をも貫通しうる魔術も持っているかもしれない。

だったら桜に任せるのもアリと言えばアリか。本人の言葉を信じれば、だが。

「よし、キャスターが止まったら位置を教えてください。俺が狙撃する。たぶん転移で躲されるから、その後のキャスターの相手は桜とライダーに任せて、セイバーはアサシンを倒せ」

『分かりました』

再び全身の力を込めて下ろしていた弓を引く。どんなオーダーにも直ぐに対応できるように、張り詰めた集中は途切れさせない。

言ってみれば、この一射は戦における一番槍に等しい。避けられるとしても痛手を負わせられるかもしれない。だからこそ――。

『校庭中央、上空五メートル』

――外せない。

一秒にも満たない時間で、強化した視力により正確な座標を割り出し、宙に浮かぶ的を想像する。

あとはいつも通り『中る』のを見て――。

的中。

「偽カラド――螺旋剣Ⅱ!!」

蒼く煌めく流星は今、解き放たれた。

I n t e r l u d e

鋭い円弧を描いて刀が迫る。

それを掌で受け止めた。

———と思つたら首元で魔術が発動していた。

「あーもうーアンタは首を狙いすぎ!!」

「ふ、それは仕方なきことだ。雅さの欠片もない野花と言えど、相対したのならば我が剣を振るうのみ」

一体、何度このようなやりとりをしたのだろう。このなんちゃってアサシンは佐々木小次郎らしいが、剣技の厭らしさと言ったら並大抵のものではない。

振つた、と分かつた時には既に当たっているのだ。しかもその軌道すら読めないというインチキさ。首元に当たる度に、術式を設置し直すという激しく非生産的な行為はそのためだ。

「はあアアア——!!」

「ふ——」

更に、である。コイツは私の最速の一撃に事も無く対応して受け流すのだ。

拳に嵌めた手袋には運動エネルギーを外側に流転する、つまり『反射』の術式を埋め込んである。触れたものを問答無用で弾き飛ばす筈。

だがしかし、それが通用しない。何故かは全く分からないがスーツと流されてしまう。いや、もしかしたら相手が流れるように避けているのかもしれないが。

「……………って、あれセイバーじゃない」

「何? セイバーだと?」

校門から数歩進んだ距離で立ち止まっているラフな格好の騎士王さん。

……衛宮君、円卓の騎士たちに殺されるんじゃないかしら。

あ、キャスターも出てきた。

「些か奇妙な服装だが、その佇まいはまさしく剣士。ふははは、ようやく我が剣を存分に振るえるというものだ」

「そういうことはやっぱり私には本気ですらなかったか。なんか悔しいわね」

「ふ——気にするな、少女よ。元よりサーヴァントの相手をするなど生身の人間には酷な話であろう」

そう言い残してアサシンはセイバーの方へ向かっていった。

正直アサシンとかキャスターぐらいなら倒せるかなって思ってたけど、こつちの攻撃が擦りもしないんだからそれ以前の問題だ。

『流転』を使えば無理矢理サーヴァント並みの速度を叩き出すことも可能だ。しかし、その速度で戦闘をするのは不可能。理由は簡単で、自分がその速さに反応できないから。

要するに外側ハードじゃなくて中身ソフトが問題なのだ。

『凜、どうする?』

(ふえ、アーチャー!?どうするって何が?)

『……………まさか、聞いていなかったとはな』

やばい。アーチャーが少し怒ってる。

(ごめんごめん。どうやったらサーヴァントとタメを張れるか考えてた)

『そんなものは私に任せておけばいい。まったく、今回の君の提案には呆れるのを通り越してある種の感嘆まで——』

(それで、本題は?)

『……………いいだろう。屋敷へ帰るまでに覚悟しておくといい。』

先程も言ったが、キャスターを衛宮士郎が宝具で狙撃しようとしている。さらに間桐桜とライダーが学校の外で待機しているぞ』

桜までいるとは。でもあの二人が組むのは予想通りかな。通い妻だし。

(アーチャーは衛宮君に合わせてキャスターをぶち抜いて)

『了解した。十字狙撃クロススナイプ、と言ったところか』

(その後は衛宮君を鍛えてあげて。私は桜に会ってくるから)

『……………本当にやるのか?』

(仕方ないじゃない。令呪が大量にあるとは言っても、貴方たちしか勝てないんだから力を付けておくに越したことはない、でしょ?)

『……………了解した。それと君は其処を離れた方がいい。あと五秒以内に』

(……えちよつと待つて早い早い早い——)

震脚でエネルギーを発生させ、それを燃料にして身体を学校の外にかつ飛ばす。

『——偽・螺旋剣Ⅱ』

(後で覚えておきなさいこの……この……!!あーもう、衛宮君のバカあ!!)

I n t e r l u d e o u t